茨城県教育財団文化財調査報告第78集

主要地方道茨城鹿島線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

梶山城跡

平成4年6月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第78集

主要地方道茨城鹿島線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

梶山城跡（かじやまじょう）

平成4年6月

財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は，産業・経済の発展に伴う広域流通機構の整備と，県土の普遍的な発展を図るために，県内の交通体系の整備を進めております。

主要地方道茨城鹿島線道路改良工事もその一環として計画されたものですが，その予定地内には，埋蔵文化財包蔵地である梶山城跡が確認されていました。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び，平成3年4月から平成3年9月にかけて主要地方道茨城鹿島線道路改良工事地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は，梶山城跡の調査結果を収録したものであります。本書が学術的な資料としてはもとより，教育・文化向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査および整理にあたり，委託者である茨城県はもとより茨城県教育委員会，大洋村教育委員会をはじめ，関係各機関および関係各位から御指導，御協力を賜りましたことに対し，深く感謝の意を表します。

平成4年6月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　礒田　勇

例　　言

1　本書は，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が，平成３年４月から平成３年９月まで発掘調査を実施した鹿島郡大洋村大字梶山字峯５９５番地ほかに所在する梶山城跡の発掘調査報告書である。

2　梶山城跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

平成４年度初めの組織改正により，従来の企画管理課は，企画管理課と経理課の二課に分かれることとなった。

理事長		礒田　勇	昭和63年６月～
副理事長		小林　元	昭和63年４月～平成３年７月
		角田芳夫	平成３年７月～
常務理事		小林　洋	平成元年４月～平成３年３月
		本田三郎	平成３年４月～
事務局長		一木邦彦	平成元年４月～平成４年３月
		藤枝宣一	平成４年４月～
埋蔵文化財部長		石井　毅	平成２年４月～
企画管理課	課長	北沢勝行	平成２年４月～平成４年３月
	課長	水飼敏夫	平成４年４月～(平成2年4月～平成4年3月企画管理課長代理)
	主任調査員	根本康弘	平成３年４月～
	主事	吉井正明	平成元年４月～平成４年３月
	主事	杉山秀一	平成４年４月～
経理課	課長	藤田和行	平成４年４月～
	主任	飯島康司	平成４年４月～(平成3年4月～平成4年3月企画管理課)
	主事	大貫吉成	平成４年４月～(平成2年4月～平成4年3月企画管理課)
調査課	課長(部長兼務)	石井　毅	平成元年４月～
	調査第一班長	久野俊度	平成３年度
	主任調査員	緑川正實	平成３年４月～平成３年９月調査
	調査員	江幡良夫	平成３年４月～平成３年９月調査
整理課	課長	沼田文夫	平成２年４月～
	主任調査員	緑川正實	平成４年４月～平成４年６月整理・執筆・編集

3　本書に使用した記号等については，第４章・第１節「遺構・遺物の記載方法」の項を参照されたい。

4　本書の作成にあたり，金属製品については永嶋正春氏（国立歴史民俗博物館助教授）から，遺構については三島正之氏（中世城郭研究会）から御指導をいただいた。

5　遺跡の概略

遺　跡　名	梶山城跡
フ リ ガ ナ	カジヤマジョウアト
副　　題	主要地方道茨城鹿島線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ	茨城県教育財団文化財調査報告第78集
著　　者	緑　川　正　實
編 集 機 関	財団法人　茨城県教育財団
発 行 機 関	財団法人　茨城県教育財団
住　　所	〒310　茨城県水戸市南町３丁目４番57号
発　行　日	1992（平成４）年６月30日

所収遺跡	市町村	コード	北　緯	東　経	標　高
梶　山　城　跡	大　洋　村	08403－0004	36°6′20″	140°32′10″	27.2m

所収遺跡	主な時代	主な遺構	主な遺物
梶　山　城　跡	縄文（前期，中期，後期，晩期）弥生（後期）古墳（前期，後期）中世（鎌倉，室町）	住居３，古墳１，堀状遺構１，堀１，土塁２，土坑14，溝３	土器，土製品（土偶），石器，石製品，金属製品（直刀，剣，刀子，鉄鏃，古銭）

目　　次

序
例言
第1章　調査経緯 …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査経過 …… 1
第2章　位置と環境 …… 3
　第1節　地理的環境 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 3
第3章　調査方法 …… 7
　第1節　地区設定 …… 7
　第2節　基本層序の検討 …… 7
　第3節　遺構確認 …… 8
　第4節　遺構調査 …… 8
第4章　遺構と遺物 …… 10
　第1節　遺跡の概要と遺構及び遺物の記載方法 …… 10
　第2節　梶山城跡 …… 14
　第3節　竪穴住居跡 …… 24
　第4節　古墳 …… 28
　第5節　土坑 …… 38
　第6節　溝 …… 38
　第7節　遺構外出土遺物 …… 40
第5章　考察 …… 51
　第1節　梶山城跡の構造 …… 51
　第2節　梶山城跡の歴史的背景 …… 52
　第3節　梶山城跡と周辺城跡との関連 …… 52
　第4節　第1号墳の構築時期について …… 54
結語 …… 57

挿 図 目 次

第1図　梶山城跡周辺遺跡分布図……4
第2図　調査区呼称方法概念図……7
第3図　基本土層図……8
第4図　梶山城跡遺構配置図……15～16
第5図　第1号堀状遺構,第2号堀,
　　土塁状遺構実測図……19～20
第6図　第1号堀状遺構,第2号堀,
　　第1・2号土塁及びトレンチ
　　土層断面図……21～22
第7図　第1号住居跡実測図……24
第8図　第1号住居跡出土遺物実測・
　　拓影図……25
第9図　第2号住居跡実測図……26
第10図　第2号住居跡出土遺物実測・
　　拓影図……27
第11図　第3号住居跡実測図……27
第12図　第3号住居跡出土遺物実測図……28
第13図　第1号墳測量図……29
第14図　第1号墳墳丘実測図……30
第15図　第1号墳墳丘土層断面図……31～32
第16図　第1号墳墳丘出土遺物状況図……33
第17図　第1号墳墳丘出土遺物実測図35～36
第18図　第1～7号土坑実測図……39
第19図　第1～3号溝実測図……41～42
第20図　遺構外出土遺物実測・拓影図(1)…44
第21図　遺構外出土遺物実測・拓影図(2)…45
第22図　遺構外出土遺物実測・拓影図(3)…47
第23図　遺構外出土遺物実測図(4)……48
第24図　遺構外出土遺物実測・拓影図(5)…49
第25図　梶山城跡概念図……53

表 目 次

表1　梶山城跡周辺遺跡一覧表……5
表2　土坑一覧表……38
表3　茨城県内の後期前半古墳概況……56

写真図版目次

PL1　梶山城跡全景
PL2　第2号堀，第1号住居跡遺物出土状況，第3号住居跡，第1号墳遺構確認，第1～7号土坑，第2号土坑，作業風景
PL3　第3号住居跡遺物出土状況，第1号墳遺物出土状況，第1号墳土層断面
PL4　第1～3号住居跡，遺構外出土遺物
PL5　第1号墳出土遺物
PL6　第1号墳出土遺物X線写真
PL7　第1号墳出土遺物X線写真・遺物出土状況
PL8　遺構外出土遺物－1
PL9　遺構外出土遺物－2
PL10　遺構外出土遺物－3

第１章　調査経緯

第１節　調査に至る経過

主要地方道茨城鹿島線は，北浦湖畔の東側を通過して県央と鹿行地区を結ぶ重要な役割を果す道路である。現在，梶山地区内の道路沿いには人家が立ち並び，道路の幅員を拡張することは極めて困難なため，茨城県は，道路の整備を図り，交通の円滑化のため，梶山地区の幅員16m，総延長約 280mにわたる区間の道路改良工事を計画した。

工事に先立ち，平成元年９月28日，茨城県は，茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。これに対し，茨城県教育委員会は，平成元年10月５日に現地踏査を実施し，工事予定地内に梶山城跡の存在を確認した。平成元年10月16日に茨城県教育委員会は，文化財保護の立場から，埋蔵文化財の取り扱いについて茨城県と協議を重ねた結果，現状保存が困難であることから記録保存の処置を講ずることとなり，調査機関として茨城県教育財団が紹介された。茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を締結し，平成３年４月１日から平成３年９月30日までの予定で梶山城跡（8,858㎡）の調査を実施することとなった。

第２節　調査経過

梶山城跡の発掘調査は，平成３年４月１日から，平成３年９月30日にかけて実施された。調査区域の一部が急斜面であり，斜面下の調査区域外に人家があるため，危険防止には十分に配慮して調査を進めた。以下，発掘調査の経過について，その概要を月ごとに記述する。

４　月　発掘調査に必要な事務所，現場倉庫の設置，調査器材の搬入など発掘調査の諸準備を行う。27日には，発掘調査の円滑な推進と作業の安全を願って鍬入れ式を挙行した。早速，遺跡の清掃作業を行った。

５　月　調査区内にグリッドを設定し，調査区北部からグリッドによる試掘を開始し，グリッドによる試掘を８分の１まで拡張した。テストピットにより土層の観察を行う。

６　月　前月同様，北部平坦部の試掘を実施し，グリッドを４分の１まで拡張した。その結果，縄文式土器片と共に土坑の落ち込みが確認できたため，中旬から遺構が確認されたグリッドを拡張し，人力で表土除去を行って土坑を確認した。続いて土坑の調査を開始し，下旬までに，土坑７基の調査を終了した。

７　月　北側斜面の土層の調査を実施すると共に，調査区東部の平坦部をトレンチによる試掘

調査を行った。試掘の結果，縄文式土器片，弥生式土器片と共に住居跡や溝・土坑の落ち込みが確認された。その後，重機による表土除去を行い，遺構の確認作業を行った。

8　月　遺構確認状況の写真撮影を行い，住居跡や溝・土坑の調査を開始した。5日からは，古墳の発掘調査を開始し，墳丘部の埋葬施設から直刀，刀子，鉄鏃等が出土した。30日までに，住居跡3軒，土坑7基，溝3条の調査を終了した。

9　月　中旬までに，古墳の墳丘部の土層及び周溝の調査と堀状遺構1条，堀1条，及び土塁2か所の調査を終了した。21日には，現地説明会を開催し，25日には，航空写真撮影を実施した。その後，補足調査及び資料整理を行い，30日には一切の調査を終了した。

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

梶山城跡は，鹿島郡大洋村大字梶山字峯 595番地ほかに所在し，大洋村役場から北西約３kmに位置している。

大洋村は，首都東京から北東へ約80kmに位置し，太平洋に面して茨城県の南東部に所在している。村域は，東西 6.4km，南北 9.4km，面積は約43.63km²である。人口は，平成４年３月末現在11,138人である。北は鹿島郡鉾田町，東は太平洋，南は鹿島郡大野村，西は北浦に接している。集落は村を南北に縦断する国道51号沿い及び主要地方道茨城鹿島線沿いに形成されている。当村の主な産業は，畑作を中心とした農業で，近年メロンをはじめとする施設園芸農業が急激に発達し，京浜市場を中心に全国に出荷されている。東の太平洋岸には，別所釜・京知釜海水浴場があり，一方西の北浦湖畔は良い釣場となっている。さらに，山林等を宅地造成して別荘等が建てられ，首都圏のリゾート化が進められている。

村域の地形は，中央部の台地と東部及び西部の低地に大別できる。村の中央部は，北から南にかけて，標高20～45mの鹿島台地（洪積台地）で，台地の縁辺部は侵食谷で複雑な地形となっている。台地上は畑及び山林となっている。東部は太平洋に面する低地で，西部は北浦に面する沖積低地で水田になっている。

地質は，基盤となる鉾田層の上位に鹿島台地の主体をなす成田層が堆積し，さらにその上位に，常総粘土層・関東ローム層が堆積している。鉾田層は，砂礫を含む砂層で，厚さ５m程である。成田層は，主に中砂・細砂からなり15m程堆積している。常総粘土層は，小石及び砂が混入している乳褐灰色の粘土層で，厚さ１m程である。関東ローム層は，火山灰層で厚さ２m程である。

梶山城跡は，大洋村の中央部西端に所在し，西側眼下に北浦を臨む鹿島台地の標高27m前後の舌状台地縁辺部に所在している。この台地の北側と南側には，北浦からのびた小支谷が入っており，台地の周辺は北浦湖畔の沖積低地が開け，主に水田となっている。

台地上は，畑地や山林となっており，水田との比高は約23mである。

第２節　歴史的環境

大洋村には，先土器時代から鎌倉・室町時代に至る貝塚や古墳などの遺跡が数多く分布しており「茨城県遺跡地図」(1)には，先土器時代２遺跡，縄文時代51遺跡，弥生時代25遺跡，古墳時代35遺跡，奈良・平安時代19遺跡，鎌倉・室町時代16遺跡を数えることができる。しかし，これらの

第１図　梶山城跡周辺遺跡分布図

表1　梶山城跡周辺遺跡一覧表

図中番号	遺跡名	遺跡の時代							主な遺構・遺物
		先土器	縄文	弥生	古墳	奈・平	鎌・室	江戸	
1	前新田遺跡	○	○						礫器・掻器・縄文中期土器
2	二重作遺跡	○	○						剝片石器・縄文式土器（早～後期）
3	向地遺跡		○						縄文式土器（早・前期）
4	阿玉遺跡		○						縄文式土器（前期）
5	井上貝塚		○						縄文式土器（中・後期）
6	上幡木貝塚		○	○					縄文式土器（中期）・弥生式土器
7	和田貝塚		○	○					縄文式土器（中期）・弥生式土器
8	札遺跡		○	○					縄文式土器（中期）・弥生式土器
9	梶山城跡		○	○	○		○		縄文式土器(後期)・弥生式土器(後期)・鉄製品・古墳1基
10	二重作古墳群				○				前方後円墳3基・円墳17基
11	梶山古墳群				○				前方後円墳9基・円墳19基
12	阿玉古墳群				○				円墳4基
13	大峰山古墳群				○				前方後円墳2基・帆立貝古墳1基・前方後方墳1基・円墳3基
14	前原古墳群				○				円墳4基・方墳2基
15	札古墳群				○				円墳5基
16	上幡木A古墳群				○				円墳2基
17	伊勢山古墳群				○				円墳2基
18	膳立塚古墳				○				円墳1基
19	三神山古墳群				○				円墳2基
20	中居窯跡					○			瓦谷窯跡1基
21	中居館跡					○			
22	中居城跡						○		
23	阿玉城跡						○		
24	札城跡						○		
25	武田城跡						○		
26	（福泉寺）						○		釈迦如来立像　1体（鎌倉時代末）

※ 主な遺構・遺物については「大洋村史」及び「大峰山古墳群調査報告書」に拠った

ほとんどは未調査の状態であり，その内容が具体的に判明している遺跡は僅かにすぎない。

先土器時代の遺跡は，礫器・掻器・石核を出土した前新田遺跡＜1＞，剝片石器を出土した二重作遺跡＜2＞の2遺跡が知られている。(2)

縄文時代では，特に中期以降には遺跡の数も増加している。早期では，撚糸文系の土器が出土している二重作遺跡，沈線文が施された尖底土器片が出土している向地遺跡＜3＞，前期では，黒浜式土器が出土している阿玉遺跡＜4＞などがあげられ，中期以降では，ウミニナ，ダンベイチサゴ，サルボウ，ハマグリなど多数の貝類が出土している井上貝塚＜5＞，中期阿玉台式土器をはじめ土錘などが出土している上幡木貝塚＜6＞，中期加曽利E式から後期安行式主体の土器が出土している和田貝塚＜7＞，土偶が出土している札遺跡＜8＞などが確認されている。さらに，これらの遺跡からは，石錘，石斧，石鏃などの石器類も出土している。

弥生時代の遺跡は，胴部に羽状縄文が施されている長頸壺，縦目に５本の櫛目文が施されている十王台式壺などが出土している二重作遺跡などがある。北浦に面する台地上に，中・後期の土器を出土する遺跡が確認されているが，住居跡の検出については，梶山城跡＜９＞の第１・２号住居跡が初めてであると思われる。

古墳時代になると，数多くの古墳が築造されている。二重作古墳群＜10＞，梶山古墳群＜11＞，阿玉古墳群＜12＞，大峰山古墳群＜13＞，前原古墳群＜14＞，札古墳群＜15＞，上幡木Ａ古墳群＜16＞，伊勢山古墳群＜17＞，膳立塚古墳＜18＞，三神山古墳群＜19＞などがある。墳形別にみると，前方後円墳が18基，前方後方墳が１基，方墳が２基，円墳71基が確認されている。これらの多くは数基もしくは十基あまりが一群となる古墳群を形成し，ほとんどが台地縁辺部に所在している。これらの中で，大峰山古墳群中の第４号墳[3]は，全長約22mの帆立貝式古墳で，北西に突出する丘陵の先端部に所在しており，梶山城跡で調査した第１号墳に類似している。梶山古墳群中の並松に所在する梶山古墳[4]は，径約40m前後の円墳と推定され，墳丘の南西裾部からは，箱式石棺が検出され，その中からは人骨５体，副葬品として直刀10口，把頭５点，刀子１点，耳環３個及び多数の玉類などが出土している。

奈良・平安時代の遺跡としては，布目瓦や厚い平瓦の破片が発見され，瓦窯があったと思われる中居窯跡＜20＞，方形の濠を巡らし古井戸が残っている中居館跡＜21＞がある。

中世になると，鹿島郡の豪族として権勢を誇ったのは，大掾氏一族の鹿島氏である。鹿島政幹の第３子時幹が中居四郎と称して1300年頃中居に住し，築城したのが中居城跡[5]＜22＞であり，棚良谷津の渓谷と札川に囲まれた城山である。中居時幹の第２子時家が梶山二郎と称して築いた梶山城跡，中居時幹の第３子幹時が阿玉三郎と称して阿玉に住し，地頭となって築いた阿玉城跡＜23＞，平国香の後裔平繁幹が札に住して築いた札城跡＜24＞，武田次郎左衛門尉によって築かれた武田城跡＜25＞などがある。大掾高幹の次男忠幹が建立し，その後北条高時が再興したという福泉寺[6]＜26＞には，村内唯一の国指定重要文化財の清涼寺式釈迦如来立像がある。

以上のように，大洋村は太平洋及び北浦の水資源に恵まれた洪積台地上に，原始・古代から近世まで各時代にわたり多くの遺跡があり，この地に人々の生活が営まれてきたことが窺える。

引用・参考文献

(1)　「茨城県遺跡地図」　茨城県教育委員会　1987年

(2)　「大洋村史」　大洋村　1979年

(3)　「大峰山古墳群調査報告書」　大洋村教育委員会　1983年

(4)　「常陸梶山古墳」　大洋村教育委員会　1981年

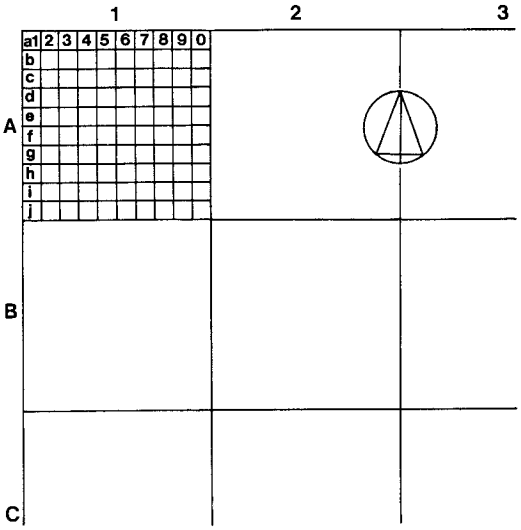
(5)　今瀬文也　「日本城郭大系４　茨城・栃木・群馬」　新人物往来社　1979年

(6)　茨城県歴史散歩研究会　「茨城県の歴史散歩」　山川出版社　1985年

第３章　調査方法

第１節　地区設定

発掘調査を実施するにあたり，遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。調査区の設定は，日本平面直角座標第IX系，X軸(南北)12,180m，Y軸(東西)63,420mの交点を基準点として，40m方眼を設定し，この40m四方の区画を大調査区(大グリッド)とした。さらにこの調査区を東西，南北に各々十等分して４m四方の小調査区(小グリッド)を設定した。調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用いて表記した。まず，大調査区の名称は，北から南へ「A」，「B」……，西から東へ「１」，「２」……と大文字を付し，「A1区」，「B1区」のように呼称した。さらに，大調査区を４m方眼に 100分割した小調査区をそれぞれ同様に，北から南へ「ａ」，「ｂ」，……「ｊ」，西から東へ「1」，「2」，……「9」，「0」と小文字を付した。小調査区の名称は，大調査区の名称と合わせて，「A1a$_1$」区，「B2e$_2$」区のように呼称した。



第２図　調査区呼称方法概念図

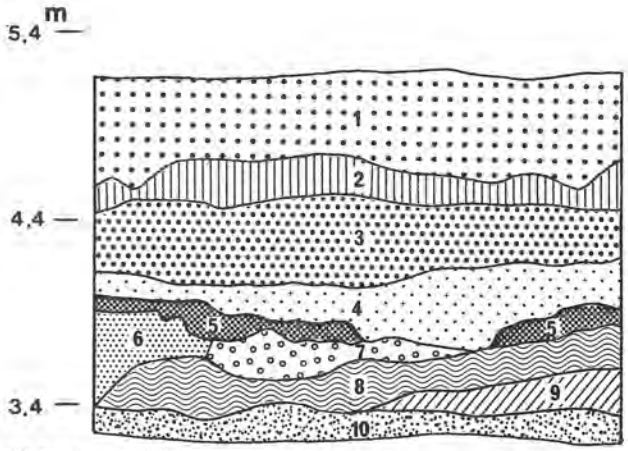
なお，基準点の杭打ち測量は，財団法人茨城県建設技術公社に委託した。

第２節　基本層序の検討

発掘調査は，北部低地から実施したため，A2b$_7$区内にテストピットを設定し，土層を観察した。

第１層は表土で，40～65cm ほどの厚さを有し，小石を微量含む褐色土であり，上層約20cm には竹根及び腐食土も含まれている。第２～４層は，砂層である。第２層は，小石少量を含む明褐色土で，10～40mの厚さを有し，第３層は，小石少量を含む橙色土で，20～50cm の厚さを有する。第４層は，小石微量，粘土小ブロック少量を含むにぶい橙色土で10～45cm の厚さを有する。第５層は，明褐灰色の粘土層で，締まり，粘性ともに強く15cm 前後の厚さを有している。第６～10層は砂層である。第６層は細かい粒子でさくさくしている明褐色土で15～30cm の厚さを有している。第７層は，小石を少量含む黄橙色土で20cm 前後の厚さを有している。第８層は，小石・粘土

小ブロックを微量に含み荒い粒子でざらざらしている明褐色土で12～25cmの厚さを有している。第9層は，小石微量，粘土小ブロックを少量含む黄褐色土で25cm前後の厚さを有している。第10層は，粒子の細かいにぶい黄橙色土で10～20cmの厚さを有している。



第3図　基本土層図

第3節　遺構確認

梶山城跡の遺構確認は，次のような方法で実施した。まず，調査区域の北部低地にグリッドを設定し，調査面積の16分の1，次いで8分の1の割合で行った。4分の1まで試掘を行ったが，数基の土坑しか確認されなかった。そのため，遺構が確認されたグリッドを拡張していく方法を採り，人力による表土除去と遺構確認作業を実施した。その結果，土坑7基を確認した。東部平坦部においては，幅1mのトレンチを入れて遺構確認を行った結果，縄文式土器片，弥生式土器片とともに住居跡や土坑と思われる落ち込みが確認され，表土の厚さは30～50cmであることも判明した。この試掘結果をふまえて，重機による表土除去を実施したあと，人力による遺構確認を行い，住居跡3軒，土坑7基，溝3条を確認した。さらに，当初調査区中央部の城跡の物見塚と思われた築山は，周溝が確認され古墳と判明した。梶山城跡の遺構確認は，トレンチによる試掘を行い実施した。その結果，北西部斜面から縦堀1条，西部斜面から腰郭2か所，東部平坦部から堀1条，土塁2か所が確認できた。

第4節　遺構調査

梶山城跡における遺構の調査は，次の方法で行った。

住居跡の調査は，長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設定し，4区に分けて掘り込む「四分割法」を基本とした。地区の名称は，北から時計回りに1～4区とした。堀・溝の調査は，適宜な位置に土層観察用ベルトを設定し，掘り込みを実施した。土坑の調査は，長径で二分割して掘り込む「二分割法」で行った。古墳の墳丘の調査は，墳丘全体を二分割し，南東

面と北西面を土層観察面とし，表土，盛土，旧表土の堆積の様子を調査し，基本的には20分の１の図面に記録した。

土層観察は，色調・含有物・混入物の種類や量及び粘性・締まり具合等を観察して，土層分類の基準とした。色調の判定は，「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄日本色研事業株式会社）を使用した。

遺物の取り上げについては，住居跡，堀，溝及び土坑の各区と遺物番号，出土位置，レベル等を記録して収納した。

遺構や遺物の平面実測は，水糸方眼地張り測量で行った。土層断面や遺構断面の実測は，標高をもとに水平にセットした水糸を基準にして実測した。縮尺は，20分の１を基本としたが，炉や部分的な微細図については10分の１の縮尺で作成した。ただし，古墳については，平板実測も適宜実施した。

記録の過程は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成を基本とした。図面や写真に記録できない事項に関しては，野帳及び調査記録カードに記録し，さらに遺構カードに整理した。

第４章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と遺構及び遺物の記載方法

１　遺跡の概要

梶山城跡は，鹿島郡大洋村大字梶山字峯 595番地ほかに所在する。当遺跡は，鹿島台地の中西部，大洋村役場の北西約３ kmの台地縁辺部にある。城域は，東西約 300m，南北約 240mで，西方向へ張り出した舌状台地の西端部にあり，標高は27mである。北側及び西側は沖積低地で水田となっており，当城跡と低地との比高は４～27mである。調査区は，当城跡の西端部で，東西に30～60m，南北約 230m，面積8,858㎡である。現況は畑・竹林及び山林である。

梶山城は，中居時幹の第２子時家がこの地に住して梶山二郎と名乗ったのが始まりで，その後1416年の上杉弾秀の乱に前関東管領弾秀に味方して翌年敗れ，廃城となるまで梶山氏の居城であったと伝えられている。

今回の調査によって検出された遺構は，梶山城に関るものとして縦堀１条，堀１条，土塁２か所，腰郭２か所である。その他弥生時代後期に比定される竪穴住居跡２軒，古墳時代前期に比定される竪穴住居跡１軒，古墳時代後期に比定される帆立貝式と思われる古墳１基，土坑14基，溝３条である。土坑のうち第１～７号土坑は，調査区北部から，それ以外は調査区の中央部から南部にかけての台地平坦部から検出されている。

遺物は，遺物収納箱（60×40×20cm）で７箱程出土している。梶山城跡に関る遺物は出土しない。縄文式土器は，主に北部平坦部のグリッド及び土坑の上・中層から土器片が少量出土している。第３号土坑付近から縄文時代後期に比定される土偶が１点出土している。住居跡からは，弥生時代後期十王台式に比定される壺の口縁部及び胴部片がごく少量，古墳時代前期の五領期に比定される小形高坏が１点出土している。古墳の埋葬施設からは，直刀，刀子および鉄鏃等が，出土している。

２　遺構・遺物の記載方法

本書における遺構及び遺物の記載方法は，以下のとおりである。

(1)　使用記号

遺構

名称	住居跡	土坑	溝	土塁	古墳
記号	ＳＩ	ＳＫ	ＳＤ	ＳＡ	ＴＭ

遺物

土　器	土製品	石　器	金属製品
Ｐ	ＤＰ	Ｑ	Ｍ

(2) 遺構及び遺物の実測図中の表示

炉　焼土　粘土　繊維土器　● 土器　★ 鉄製品

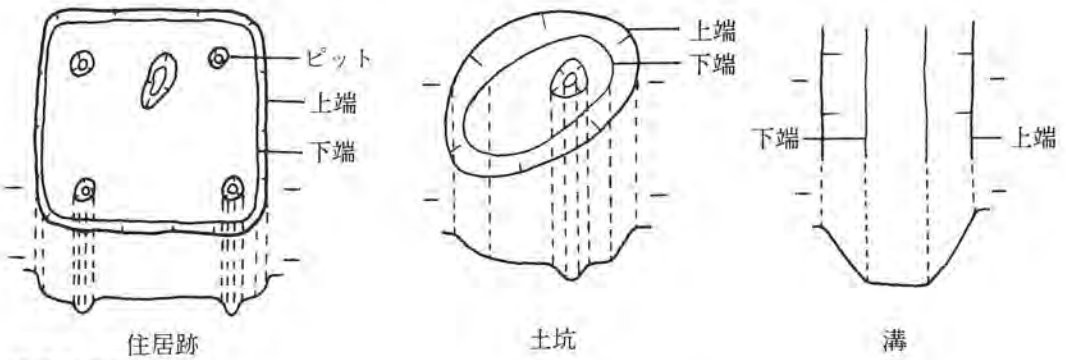
(3) 遺構番号

遺構番号については，調査の過程において遺構の種別毎，調査順に付したが，整理の段階で遺構でないと判断したものは欠番とした。

(4) 土層の分類

土層観察における色調の判定は，「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社）を使用し，図版実測図中に記載した。撹乱層については「K」と表記した。

(5) 遺構実測図の作成方法と掲載方法



住居跡　土坑　溝

遺構実測図

① 住居跡・土坑の実測図は，縮尺20分の１の原図をトレースして版組し，それをさらに３分の１に縮小して掲載することを基本とした。

② 溝は，縮尺20分の１の原図をトレースして版組し，それをさらに３分の１に縮小して掲載した。

③ 古墳の墳丘については，縮尺50分の１の地形図をトレースして版組し，それをさらに３分の１に縮小して掲載した。

④ 実測図中のレベルは標高であり，m単位で表示した。また同一図中で同一標高の場合に限り，一つの記載で表し，標高が異なる場合は各々表示した。

⑤ 各土層断面は，原則として縮尺20分の１の原図をトレースして版組し，それをさらに３分の１に縮小して掲載した。

⑥ 本文中の記載について

○「位置」は，遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。

○「重複関係」は，他の遺構との切り合い関係を記した。

○「平面形」は，壁の上端部で判断し，方形，長方形の場合は下記の分類基準を設け，そ

のいずれかを明記した。

方形　（短軸：長軸＝１：１.１未満のもの）

○「規模」は，壁の上端部の計測値であり，長軸，短軸をm単位で表記した。（　）を付したものは現存値を表す。

○「長軸方向」は，炉をとおる線を主軸とし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ傾いているかを角度で表示した。［　］を付したものは，推定を表す。

○「壁」は，床面からの立ち上がり角度が81°～90°を垂直，65°～80°を外傾，65°未満を緩斜，さらに90°以上を内傾とした。壁高は，残存壁高の計測値である。

○「壁溝」は，その形状や規模を記述した。規模は床面からの計測値とした。

○「床」は傾斜や床質等を表記した。

○「ピット」は，その住居跡に伴うと考えられるピットをＰで表示し，P_1・P_2はピット番号を表し，さらに，ピットの直径と深さを記述した。

○「覆土」は，堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」，人為堆積の場合は「人為」と記した。

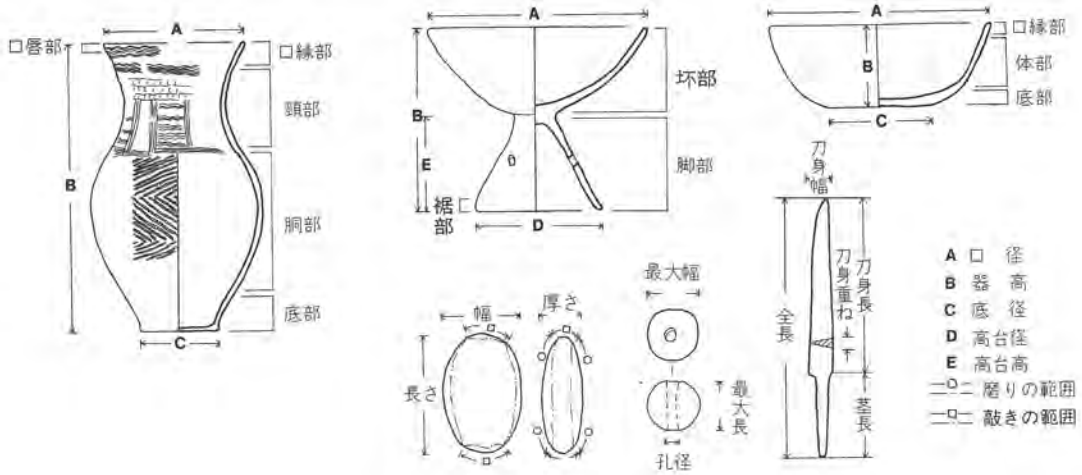
○「遺物」は，主な遺物の種類や出土位置，出土状態を記述した。

○「所見」は，当該住居跡についての時期やその他特記すべき事項を記述した。

(6)　遺物実測図の作成方法と掲載方法

①　土器の実測は，四分割法を用い，中心線の左側に外面，右側に内面及び断面を表した。

②　土器の拓影図は，右側に断面を表し，表・裏２面を掲載したものは，断面を挟んで左側に外面，右側に内面を掲載した。遺物は原則として実測図をトレースしたものを３分の１に縮小して掲載することを基本とした。



(7)　表の見方

＜住居跡一覧表＞

住居跡番号	位置	長軸方向	平面形	規模		床面	ピット数	覆土	出土遺物	備考
				長軸（m）×短軸（m）	壁高（cm）					

○住居跡番号は，発掘調査の過程で付した番号をそのまま付した。

○位置は，小調査区（小グリット）名で表示した。他の調査区にまたがる場合は，遺構の占める割合が最も大きい小調査区をもって表示した。

○方向は，炉を通る線が座標北から見てどの方向にどれだけ傾いているかを，角度で表示した。

例　（N－ 10°－E，N－ 10°－W）　［ ］を付したものは推定値である。

○平面形は，現存している形状の上端面で判断し，方形，長方形の場合は下記の分類基準を設け，そのいずれかを明記した。

方形…短軸：長軸＝1 ： 1.1 未満　　長方形…短軸：長軸＝1 ： 1.1 以上

○規模の欄の長軸，短軸は，平面形の上端面の計測値であり，壁高は残存壁高の計測値である。

○床面は，凹凸，平坦等の様子を示し，締まり等は解説の項で述べた。

○ピット数は，住居跡に伴うものと考えられる総数を表示した。

○覆土は，堆積状態が自然堆積の場合は「自然」，人為堆積の場合は「人為」と記した。

○出土遺物は，実測個体数を除いた遺物の種類と出土土器片の数を記した。

○備考は，重複関係や特徴等を記した。

＜土坑一覧表＞

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					

○土坑番号は，発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。また，整理の過程で土坑でないと判断したものは欠番とした。

○平面形は，円形，楕円形の場合に下記の分類基準を設けて表示した。

円形（短径：長径＝1 ： 1.1 未満のもの），楕円形（短径：長径＝1 ： 1.1 以上のもの）

○規模の欄の長径・短径は上端部の計測値（cm）で表した。

○深さは，遺構確認面から坑底の最も深い部分までの計測値（cm）で表した。

○壁面は，坑底からの立ち上がりの状態を下記の基準で分類し表示した。

垂直 　81°～90°の傾き

外傾 　65°～80°の傾き

緩斜 　65°未満の傾き

○底面は，下記の基準で分類し表示した。

平坦 —　　皿状 ∪　　凹凸 ∿　　傾斜 ＼

＜土器観察表＞

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考

○図版番号は，実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。

○法量は，A…口径，B…器高，C…底径，D…高台径，E…高台高とし，（ ）は現存値，［ ］は復元推定値を表す。

○器形の特徴は，底部，体部等の各部位について土器観察の結果を記した。

○手法の特徴は，土器の成形，整形について記した。

○胎土，色調，焼成の順で述べ，色調は「新版標準土色帖」を使用した。焼成については，「良好」，「普通」，「不良」に分類し，硬く焼き締まっているものは良好，焼きがあまく器面が剝離しやすいものは不良とし，その中間のものを普通とした。

○備考は，完存率，実測番号（P）等を記した。

＜土製品一覧表＞

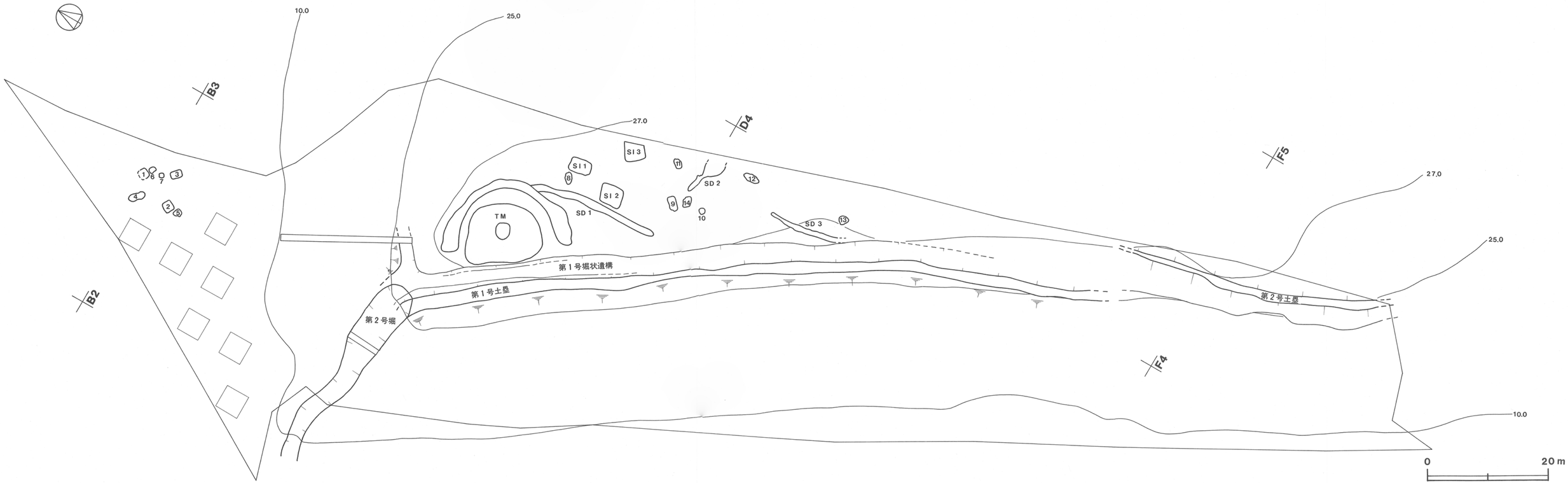
図版番号	器 種	法量 (cm)			孔径	重 量	現存率	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		

○図版番号は，実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。

○重量の欄で，（ ）を付した数値は，一部を欠損しているものの現存値である。

第2節　梶山城跡

梶山城跡は，標高27m前後の西側へ張り出した舌状台地の先端部に所在し，西側の眼下には北浦を臨むことができる。北側及び南側は，北浦から延びた小支谷が入っている。本城跡の北側，西側及び南側は急崖で城壁となっており，城壁の斜度は30°～60°を測り，東側は台地で地続きであ



第４図　梶山城跡遺構配置図

る。城跡と西側の低地面との比高は，20m前後を測る。発掘調査前の現況としては，台地上は畑地及び雑木林で，西側の低湿地は水田となっている。

当城跡は，現地踏査による観察や地形図，航空写真等から，郭を台地先端部に構築し，順次，東側の台地へ横堀によって郭を設け，城を拡張していった連郭式の城と思われ，２つの郭が確認されている。当城は，Ⅰ・Ⅱの郭間に，横堀と思われる落ち込みが確認でき，城域は，最大東西約300m，最大南北約 240mにわたる。Ⅰの郭は，当城跡の西側に位置し，東西約100m，南北約200mの規模で，「□」状を呈し，長辺方向は N-25°-W で，標高は27m前後を測る。Ⅱの郭は，Ⅰの郭の東側に位置し，東西160m，南北170mの規模で，「⊏」状を呈し，長辺方向は N-100°-W で，標高28m前後を測る。Ⅰ・Ⅱの郭の城壁上端部には，高さ１m前後の土塁が確認できる。Ⅰの郭には，南西側の土塁内側に上幅3～4mの堀状遺構が構築されており，西コーナー壁には，縦堀及び腰郭が確認され，南コーナー壁の上位にも腰郭が確認されている。Ⅰの郭の西部には，古墳１基が確認されているが，古墳を櫓台として利用して物見櫓を築造していたと思われる。

今回の調査は，Ⅰの郭の西部と城壁の斜面部で，東西約40m，南北約180mにわたる道路幅である。調査の結果，調査区内からは，当城に関わると思われる堀状遺構１条，縦堀１条，土塁２か所，腰郭２か所，虎口１か所，櫓台１か所を検出している。遺物は，直接城跡に関わるものは出土しなかったが，砥石３点が試掘時のグリッド及びトレンチから出土している。

以下，当城跡から検出された遺構について概観する。

１　堀状遺構及び堀

第１号堀状遺構（第５・６図）

位置　本跡は，調査区の中央部 C2区，C3区の，Ⅰの郭北西端部の第１号土塁の内側に確認されている。本跡の外側には，第１号土塁が本跡と隣接して，北西端部から南東方向へほぼ直線的に延びている。

方向　Ⅰの郭南東端部の土塁内側を $C3j_2$ 区から南東方向（N－147°－E）にほぼ直線的に110m ほど延び，南東端部は，さらに，第２号土塁の内側を南東方向へ延びていくものと思われる。北西端は，第２号堀と合流している。

規模と形状　トレンチ調査による規模は，上幅3.02m，下幅1.42m，深さ95cm を測る。断面形状は箱薬研の形状を呈し，底面及び壁面は堅く締まっている。

覆土　土層は，レンズ状に自然堆積をしている。１層は，表土で木の根を多く含み，ローム小ブロック中量が混入した褐色土である。２層はローム小ブロック少量，ローム粒子中量を含むにぶい褐色土である。３層は，炭化粒子少量，ローム中ブロック中量を含む褐色土である。さらに最下位の４層は，褐色土を少量含む砂層である。

所見　本跡は，堀底が堅く締まっていることから通路の機能や南西の城壁斜面部からⅠの郭へ進入しようとする外敵を遮断するための構築であったと思われる。遺物が出土していないので，時期についての詳細は不明である。

第2号堀（第5・6図）

位置　本跡は，調査区の中央部C2区，Ⅰの郭の西コーナーの城壁斜面部に確認されている。

方向　Ⅰの郭の西コーナーの城壁上端部，C2b$_2$区から西方向（N－85°－W）に，斜度30°前後でほぼ直線的に約23m延びて，さらに調査区外に約11m，同傾斜をもって標高約6.3mの低地に至る。

規模と形状　トレンチ調査による断面の規模は，上幅は4.06m，下幅1.25m，深さ24cmを測る。断面形状は鍋底状を呈している。壁はやや柔らかく，緩やかに立ち上がっている。本跡の東端（城壁西コーナー上端部）は，標高約24.5mを測り，全長約23m，斜度30°前後をもって西端の標高約14.2mに至る。両端の比高は，18.2mである。

覆土　上層に小石少量，細砂中量を含む褐色土，下層に小石少量，細砂多量を含む褐色土及び黒褐色土が自然堆積している。

所見　本跡は，梶山城跡の南西部，Ⅰの郭の西コーナー壁斜面部に構築されている縦堀であり，主郭の北西壁斜面部及び南西壁斜面部の敵を分断するために構築されているものと思われる。

2　土塁

第1号土塁（第5・6図）

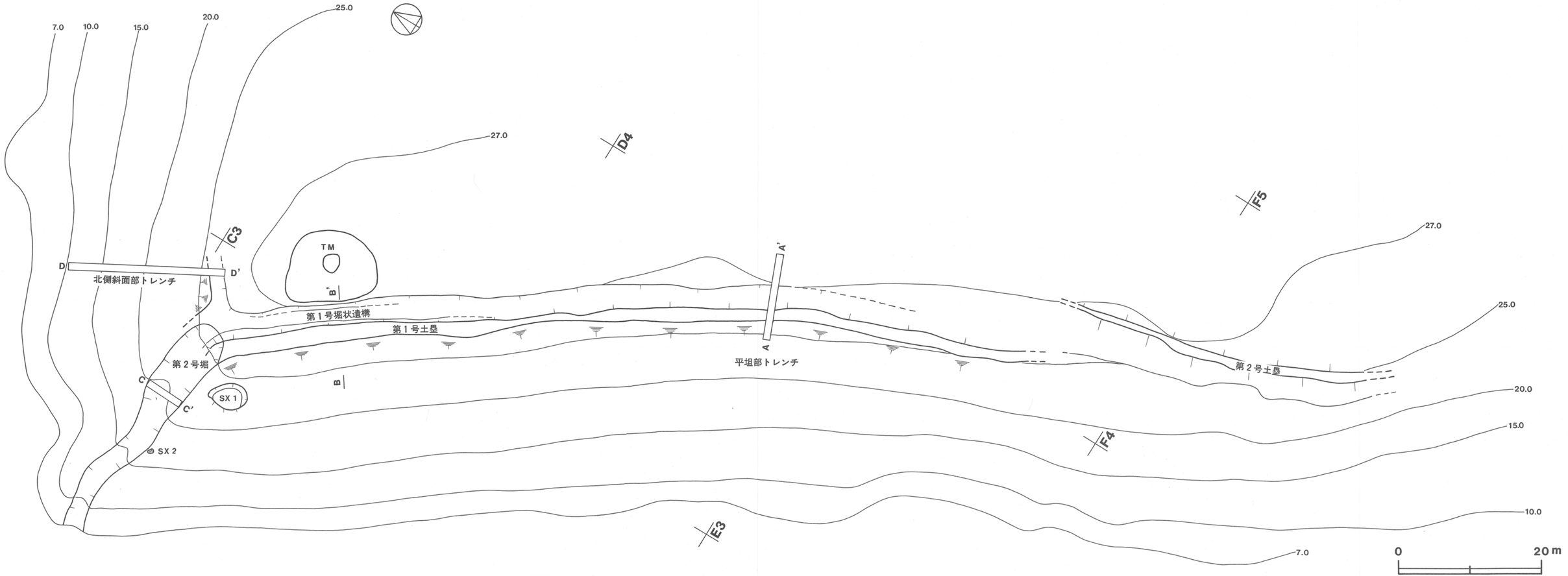
位置　本跡は，調査区中央部C2区，C3区に確認され，Ⅰの郭の南西端部に構築され，本跡の内側には，第1号堀状遺構が本跡と並行して，北西端部から南東方向に直線的に延びている。

方向　主軸方向はN-45°-Eを指し，北西端部から南東方向にほぼ直線的に110mほど延びて，南東部は「⎽⎺」状となり虎口となっている。（「第1号土塁　　第2号土塁」）

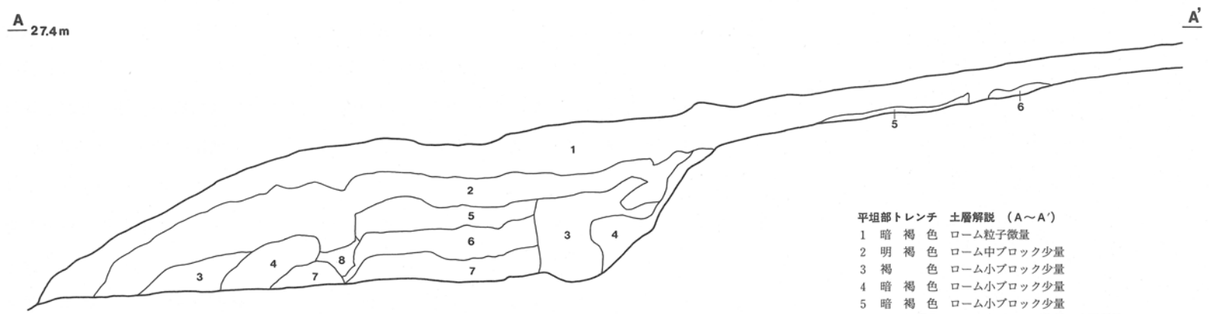
規模と形状　土塁の形状は，「⎽⎺」を呈し，断面観察における規模は，基底部の最大幅は3.24m，頂上部の最大幅は1.05mを測る。土塁の高さは，1.68mを測る。土塁の頂部と第1号堀状遺構の底面との比高は，約1.60mである。土塁の現況は，盛土が周囲に流出しており，本来の規模や形状よりも小さくなっていると思われる。

構築状況　基底部を，ハードロームの上面に置き，ロームブロックを含む暗褐色土，にぶい褐色土，褐色土を盛土している。盛土の上層には，第1号堀状遺構の土を盛土していることが観察される。

所見　本跡は，Ⅰの郭の南西面を形成する土塁であり，Ⅰの郭の南西壁端斜面からの外敵を防御する機能をもつものと思われる。

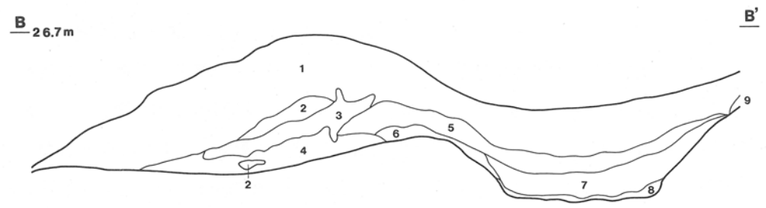


第5図　第1号堀状遺構，第2号堀，土塁状遺構実測図



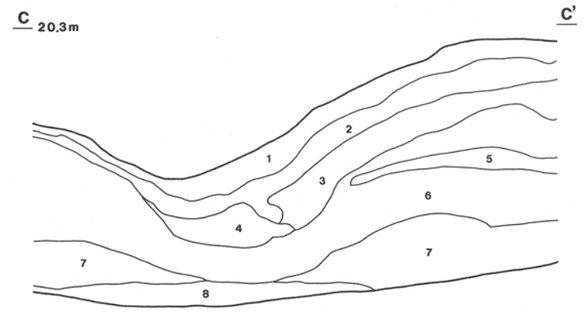
平坦部トレンチ　土層解説　（A～A′）

1　暗　褐　色　ローム粒子微量
2　明　褐　色　ローム中ブロック少量
3　褐　　色　ローム小ブロック少量
4　暗　褐　色　ローム小ブロック少量
5　暗　褐　色　ローム小ブロック少量
6　にぶい褐色　ローム小ブロック中量，小石微量
7　明　褐　色　砂多量
8　褐　　色　ローム粒子少量



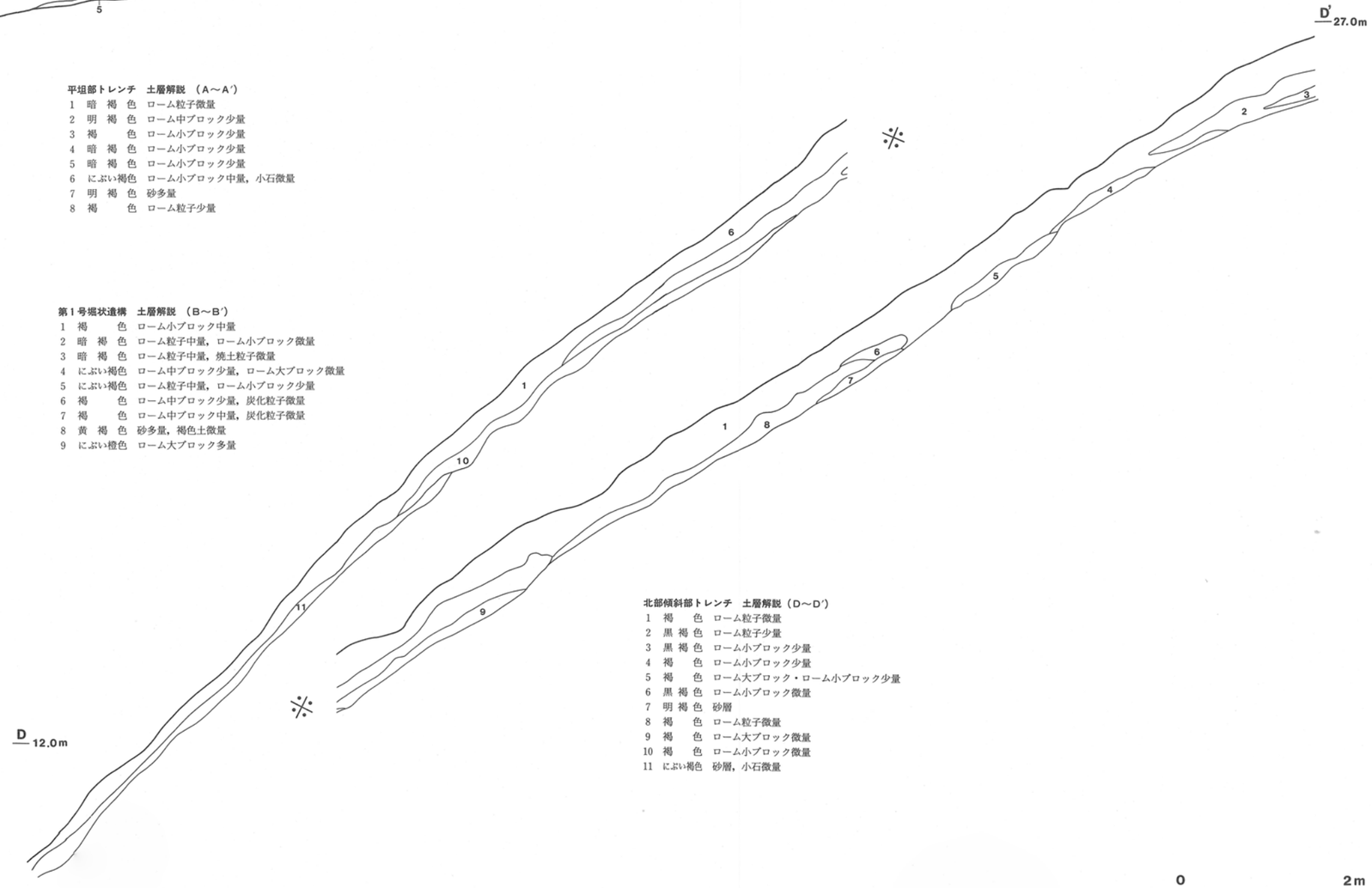
第１号堀状遺構　土層解説　（B～B′）

1　褐　　色　ローム小ブロック中量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
4　にぶい褐色　ローム中ブロック少量，ローム大ブロック微量
5　にぶい褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6　褐　　色　ローム中ブロック少量，炭化粒子微量
7　褐　　色　ローム中ブロック中量，炭化粒子微量
8　黄　褐　色　砂多量，褐色土微量
9　にぶい橙色　ローム大ブロック多量



第２号堀　縦坑トレンチ土層解説　（C～C′）

1　暗　褐　色　ローム粒子少量，小石微量
2　褐　　色　砂中量
3　黒　褐　色　砂多量，小石少量
4　褐　　色　小石微量
5　にぶい褐色　小石多量
6　明　褐　色　炭化粒子少量
7　黄　褐　色　炭化粒子中量
8　明黄褐色　炭化粒子微量



北部傾斜部トレンチ　土層解説（D～D′）

1　褐　　色　ローム粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量
3　黒　褐　色　ローム小ブロック少量
4　褐　　色　ローム小ブロック少量
5　褐　　色　ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
6　黒　褐　色　ローム小ブロック微量
7　明　褐　色　砂層
8　褐　　色　ローム粒子微量
9　褐　　色　ローム大ブロック微量
10　褐　　色　ローム小ブロック微量
11　にぶい褐色　砂層，小石微量

0　2m

第６図　第１号堀状遺構，第２号堀，第１・２号土塁及びトレンチ土層断面図

第2号土塁（第5・6図）

位置　本跡は，南部E4区，F4区に確認され，Ⅰの郭の南部の城壁上端部に構築されている。

方向　Ⅰの郭の南コーナーの城壁上端部に確認されている。北西端は，第1号土塁と「⎽⎺」状に喰違いになり虎口となっている。北東端は，調査区外に延びている。

規模と形状　断面観察における規模は，耕作による撹乱のためほとんど確認できないが，現況で土塁の規模は，頂部の馬踏幅は0.8～0.15mを測り，土塁の頂部と東側端部の畑地表面との比高は0.25～0.50mを測る。

構築状況　基底部を，ハードロームの上面に置き，ロームブロックを含むにぶい褐色土，褐色土を盛土している。

所見　本跡は，Ⅰの郭を防御するための土塁であり，南コーナー壁斜面からの外敵を防御する機能をもつものと思われる。

3　腰郭（ＳＸ－1・2）（第5図）

本跡は，当城跡の西部，Ⅰの郭の西コーナーの第2号堀の南側に上・下位に2か所確認されている。第1号腰郭はC2c$_6$区，C2d$_6$区に位置し，標高22.10mを測る。第2号腰郭はC2c$_4$区に位置し，標高16.70mを測る。規模及び形状は第1号腰郭は長径4.4m，短径2.9mの楕円形，第2号腰郭は長径3.1m，短径1.6mの楕円形である。縦堀に隣接して壁斜面部の上・下位に階段状に設けており，縦堀及び壁斜面部からの外敵進入を防御するために構築されたものと思われる。さらに腰郭は，南コーナー壁斜面部の上位にも確認でき，規模は長径10.5m，短径2.5mの楕円形である。本腰郭の北西端部は，虎口に至る細い道が隣接している。

4　虎口

本跡は，Ⅰの郭の南西壁上端部の南東寄りに確認され，第1号土塁と第2号土塁が「⎽⎺」状に喰違いとなっている。本跡へは，南西壁斜面部に細い道が確認でき，壁底部から城壁斜面中位で第3腰郭の北西側と隣接し，壁上端の虎口に至る。現在も生活道路として使用されている。

5　櫓台

本跡は，Ⅰの郭の西部に確認されている。本跡は，古墳の墳丘を削平して構築された，物見の櫓台であり，北浦湖岸等からの外敵をいち早く察知する機能を有していたものと思われる。

第３節　竪穴住居跡

当調査区から検出された住居跡は３軒で，調査区中央部のC3区に確認されている。第１・２号住居跡は，弥生時代後期の住居跡で，十王台式に比定される壺片が出土している。第３号住居跡は，古墳時代前期の住居跡で，小形高坏が出土している。

第１号住居跡（第７図）

位置　調査区の中央部，C3f$_6$区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸 3.6m，短軸 2.4mの隅丸長方形を呈している。

主軸方向　N－７°－W。

壁　壁高は，南壁で13cm，他の壁は５ cm 前後を測り，外傾して立ち上がっている。

床　北西部は撹乱を受けているが，他は全体的に平坦で硬い。

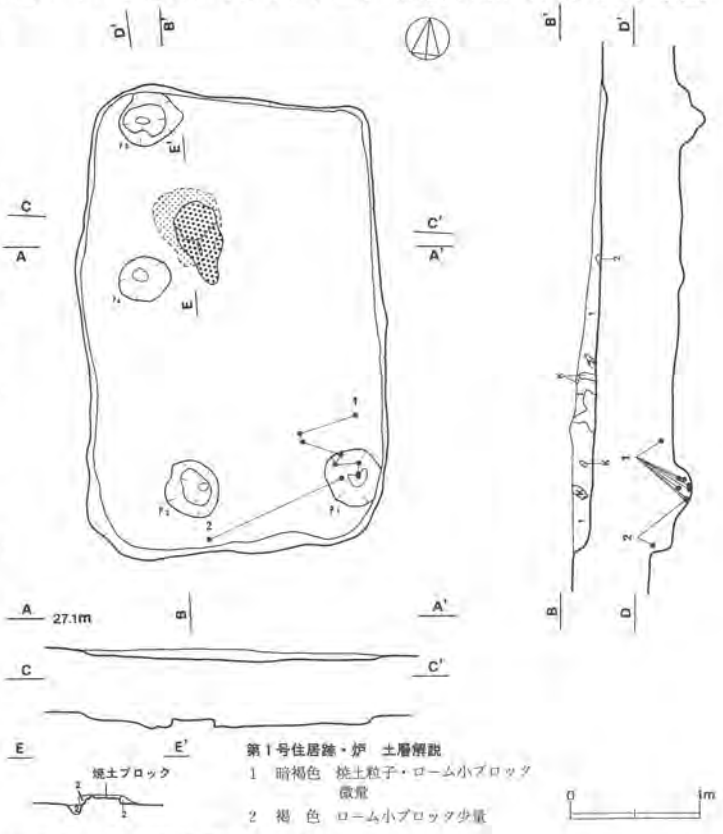
ピット　４か所（P_1～P_4）検出されている。P_1～P_4は径35～50cm，深さ12～18cm を測り，規模及び配列から主柱穴と思われる。

炉　中央部からやや北壁寄りに位置している地床炉である。平面形は径約30cm の円形を呈し，掘り込みがなく，炉床が赤色に硬く焼けている。

覆土　自然堆積。

遺物　全域にわたって，覆土中・下層から弥生式土器片が少量出土している。１の壺片は，ピット（P_1）内から横位で出土している。２の壺片は，南壁中央付近の覆土中層から横位で出土している。

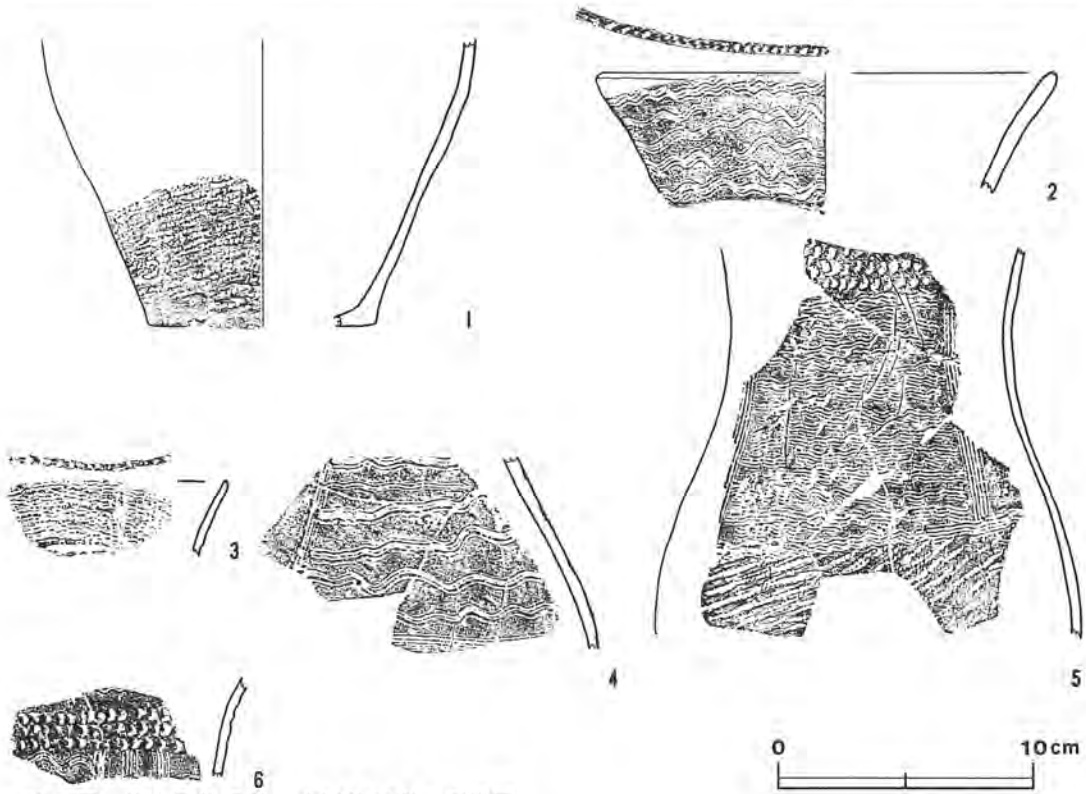
所見　本跡は，遺構の形態や遺物から弥生時代後期の住居跡と思われる。



第７図　第１号住居跡実測図

第１号住居跡出土遺物観察表（第８図）

図版番号	器　種	法　量（cm）	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備　考
1	壺 弥生式土器	B　(11.2) C　〔 8.8〕	胴中央部以上欠損。平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。胴部に付加条１種（付加２条）の縄文が施されている。	砂粒・長石 橙色 普通	P３ ５％ P_1内覆土
2	壺 弥生式土器	A　〔18.2〕 B　(4.7)	口縁部片。口縁部は外反する。口唇部に縄文原体の回転圧痕，口縁部に３本櫛歯の波状文を施している。	砂粒・雲母・パミス 橙色 普通	P１ ５％ 南壁中央部付近



第８図　第１号住居跡出土遺物実測・拓影図

第１号住居跡出土遺物拓影図（第８図）

３は，十王台式土器であり，口縁部片で，口唇部にキザミ目を施し，口縁部に４本櫛歯の波状文が施されている。４は，十王台式土器以前の土器であり，胴部片で，縦区画内に横位の波状文が充填されている。５・６は，十王台式土器並行期のものである。５は，胴部片で，頸部に刺突された隆帯が２条貼られ，頸部に５本櫛歯による縦区画内に波状文を充填し，胴部に付加条２種の縄文を羽状に施している。６は，５と同じ文様を有する頸部片である。

第２号住居跡（第９図）

位置　調査区の中央部，C3g_5区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸3.6m，短軸3.3mの隅丸方形を呈している。

主軸方向　N－5°－W。

壁　壁高は，5～8 cm で緩やかに立ち上がっているが，壁の上位は撹乱を受けている。

床　中央部及び西部は，平坦で硬いが，他は撹乱を受けている。

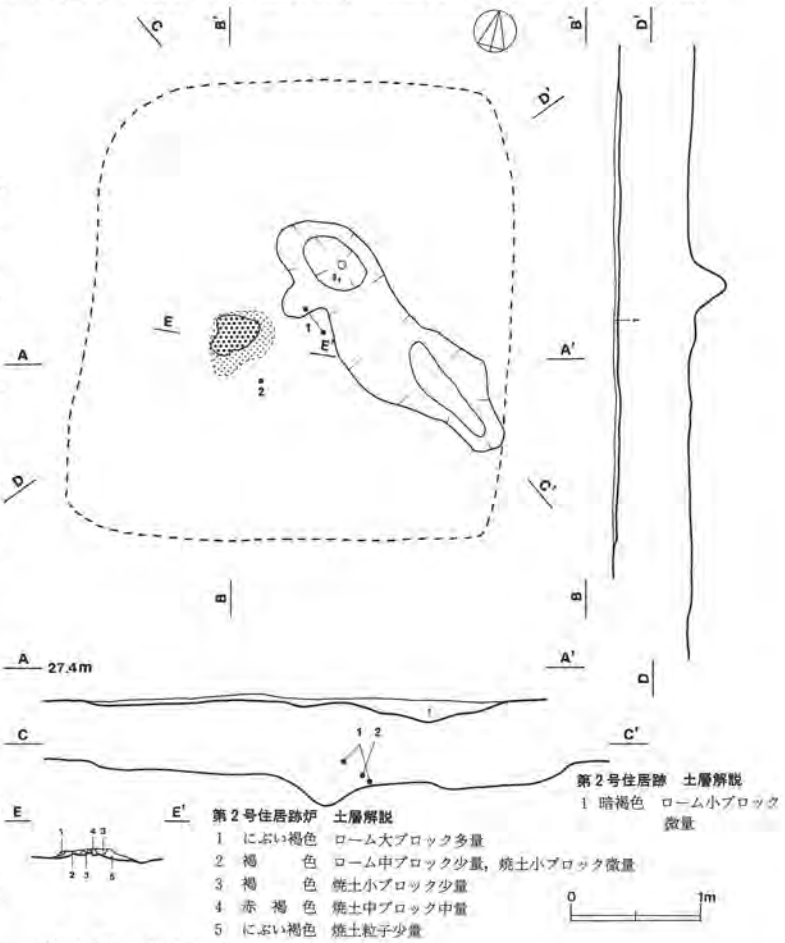
ピット　1か所（P_1）検出されている。P_1の平面形は，長径53cm，短径34cm の楕円形を呈し，深さは30cm を測り，本跡に伴うものと思われるが性格不明である。

炉　中央部に位置している地床炉である。平面形は，長径40cm，短径30cm の不整楕円形を呈し，掘り込みがなく，炉床が赤色に硬く焼けている。

覆土　自然堆積。

遺物　中央部の覆土中・下層から弥生式土器片が少量出土している。1の壺片は，中央部覆土下層から横位で出土している。2の壺片は，中央部覆土中層から横位で出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物から弥生時代後期の住居跡と思われる。



第9図　第2号住居跡実測図

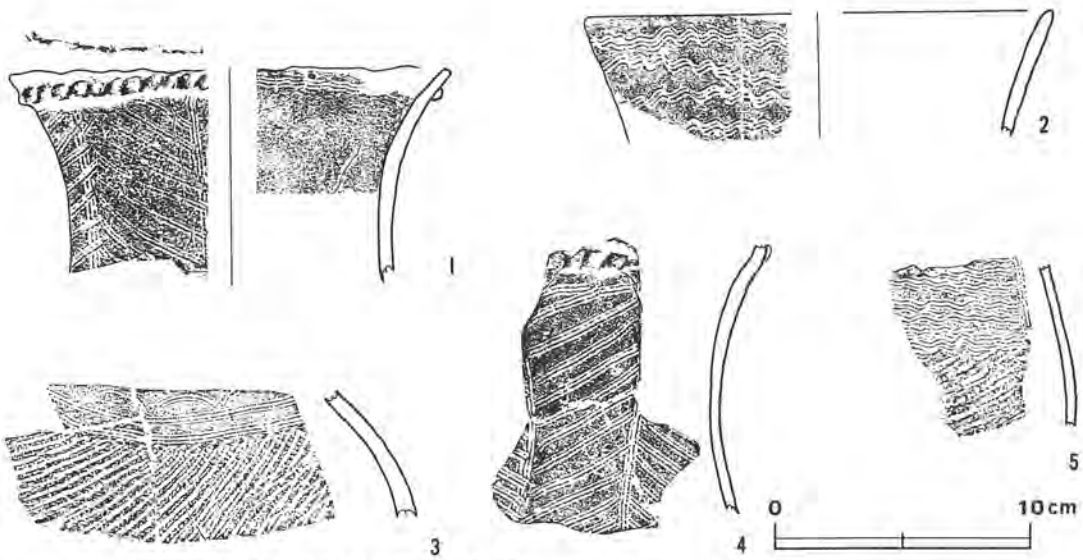
第2号住居跡出土遺物拓影図（第10図）

3・4は，十王台式土器以前の土器群である。3は，胴部片で，沈線による連弧文及び平行沈線の下に，付加条1種の縄文

第2号住居跡出土遺物観察表（第10図）

図版番号	器　種	法　量（cm）	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備　考
1	壺 弥生式土器	A　[17.3] B　(8.5)	口縁部片。口縁部は外反する。隆帯口縁。口縁部及び頸部に3本櫛歯による縦区画後，斜位の沈線文を施している。口唇内面に3本櫛歯の波状文を施している。	砂粒・雲母・パミス 橙色 普通	P 4 10% 中央部覆土下層
2	壺 弥生式土器	A　[18.4] B　(4.9)	口縁部片。口縁部は外傾する。口縁部に3本櫛歯の波状文を施している。	砂粒・長石 橙色 普通	P 5 10% 中央部覆土下層

を施している。4は，口縁部片で，口縁下に押圧隆起線が貼られている。頸部には，縦区画内に斜位の沈線が施されている。5は，十王台式土器並行期のものであり，胴部片で，縦区画内に横位の波状文を充塡し，その下位に付加条1種の縄文を施している。



第10図　第2号住居跡出土遺物実測・拓影図

第3号住居跡（第11図）

位置　調査区の中央部，C3g7区を中心に確認されている。

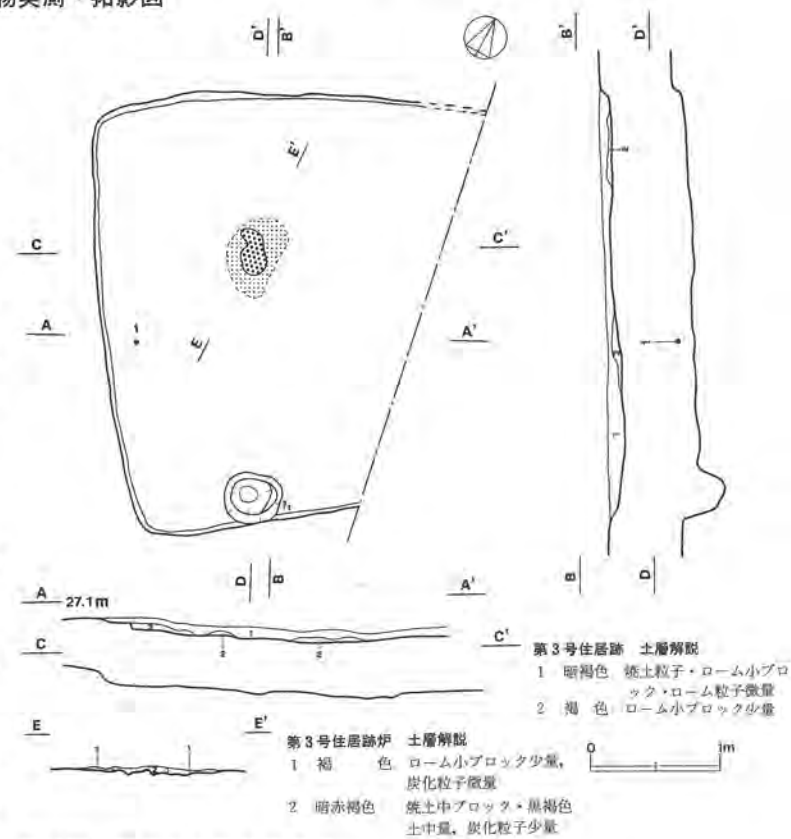
規模と平面形　東部は調査区外に延びているため不明であるが，一辺が3.3m程の隅丸方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－34°－W。

壁　壁高は8～10cmでほぼ垂直に立ち上がっている。

床　全体的に平坦で，踏み固められており堅緻である。

ピット　1か所（P_1）検出されている。P_1の平面形は，長径45cm，短径38cmの楕円形

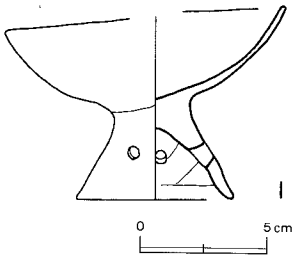


第11図　第3号住居跡実測図

を呈し，深さは22cmを測り，規模及び配列から主柱穴と思われる。

炉　中央部からやや北西側に位置する地床炉である。平面形は長径38cm，短径19cmの楕円形を呈し，炉床は，床面を4 cm程掘りくぼめて構築され，暗赤褐色に焼けている。

遺物　土師器片6点（甕片，高坏片）が覆土中層及び下層から出土している。1の小形高坏は，北西壁中央付近覆土中層から逆位の状態で出土している。



第12図　第3号住居跡出土遺物実測図

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物から古墳時代前期の住居跡と思われる。

第3号住居跡出土遺物観察表（第12図）

図版番号	器　種	法　量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	小形高坏 土師器	A　[11.0] B　7.7 D　6.2 E　3.9	脚部は外傾しながら裾部に至り，脚部中位に4孔を穿つ。坏部は大きく内彎しながら口縁に至る。	脚部，坏部とも内・外面剝離のため調整不明。	砂粒・スコリア・雲母 明赤褐色 不良	P6 90% 北西壁中央部覆土中層

第4節　古墳

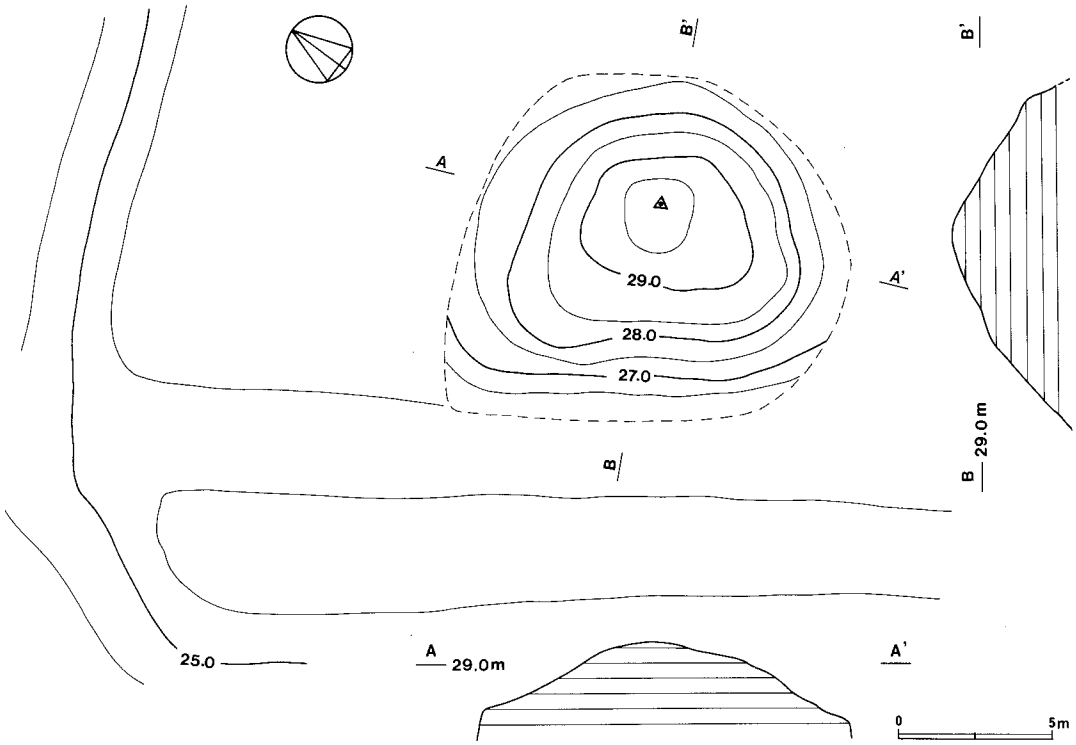
1　古墳の規模及び概観

本墳は，調査区の中央部C2区，C3区に所在する円墳で，茨城県遺跡地図に見る「梶山古墳群」における前方後円墳9基，円墳18基の中の1基である。本墳は，西方向に突き出した標高26.9mの舌状台地縁辺部に構築されている。現況は，墳頂部に4基の氏神の祠が祭られており，8本の巨木が御神木となっている。

本墳は，円墳で，墳丘と墳丘の東側を半周する周溝から成り立っているが，墳丘西端は，梶山城跡の第1号堀状遺構により削平されている。また墳丘部は，梶山城跡の櫓台として使われていたと思われ，墳頂部が一部平坦に削平されている。本墳の規模は，周溝を含め東西径［15.6］m，南北径20.9mと推定される。墳丘は，台地上の地山を整形した後に盛土をしたもので，墳丘の高さは現況で2.5mほどであるが構築時は2.8mほどの古墳であったと推定される。規模は，東西径［14.2］m，南北径15.5mと推定される。

埋葬施設は，大峰山古墳群第4号墳の類例から木棺直葬で，現在の墳頂部の表土を約50cm掘り下げて構築されている。埋葬施設の規模は，東西約1.5m，南北約2.5mと思われる。

副葬品は，直刀2口，剣1口，刀子1点，鉄鏃18点が出土している。



第13図　第１号墳測量図

2　墳丘

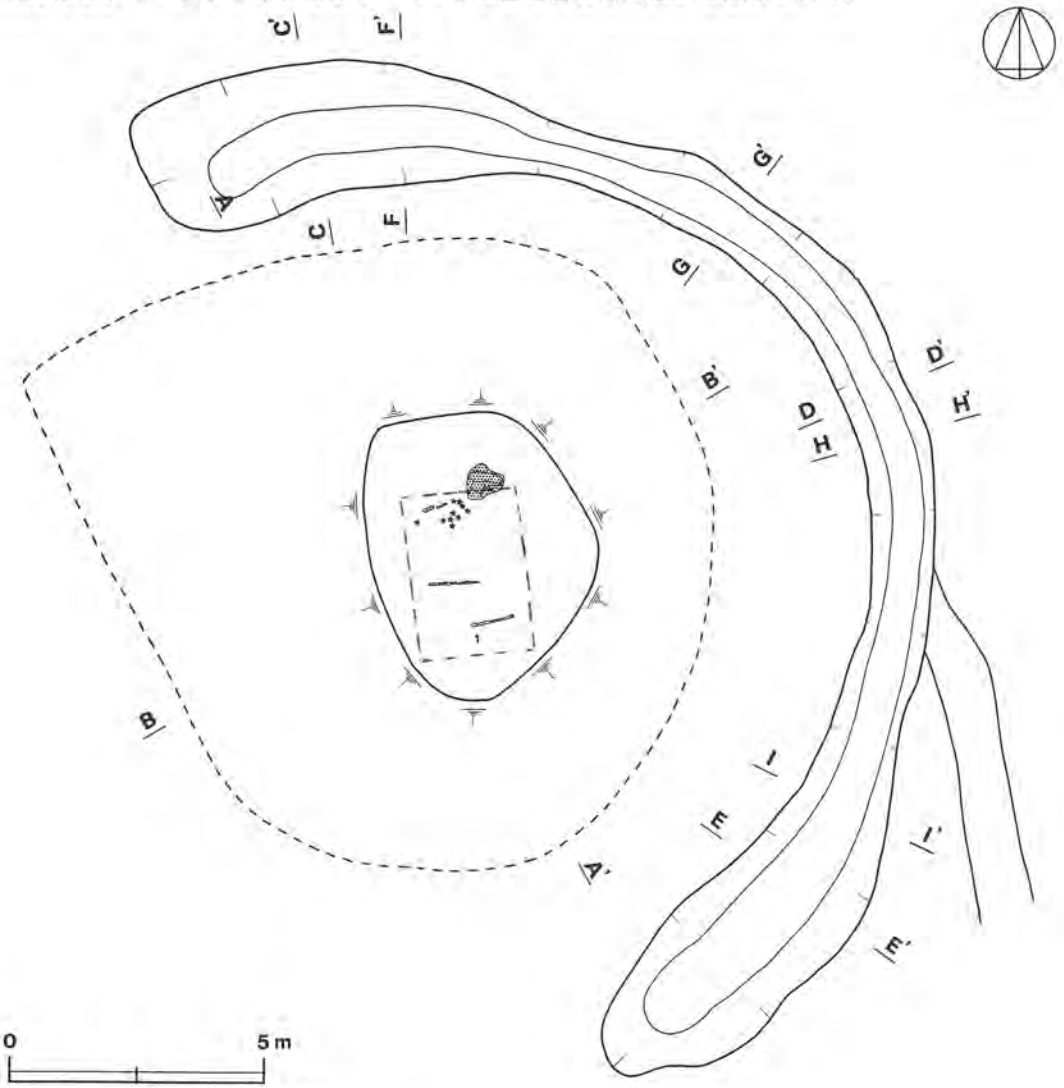
墳丘の規模は，東西径［14.2］m，南北径 15.5m，高さ約［2.8］mと推定される。

墳丘の調査は，墳頂部の埋葬施設の調査を行い，その後，墳丘を４分割して，北西部及び南東部を掘り込み，東西土層及びそれに直交する南北土層を観察した。墳丘の構築状況は，第15図の土層断面で観察すると，標高26.9mの地点で旧表土が平坦に整形され，その上位に盛土して墳丘を構築していることが確認される。土層は，南北の土層を観察してみると，１～18層からなり，第１層は，表土であり，墳頂部で25～45cm を測る。第２～６層は，炭化粒子少量，ロームブロック中量を含む暗褐色土及び褐色土が，ブロック状及び帯状に堆積している。第７層は，炭化粒子少量，ロームブロック少量および黒色土を少量含む褐色土で40cm 前後の厚さで帯状に堆積している。第８～10層は，焼土粒子少量，ローム粒子少量を含み締まりのある暗褐色土及び黒褐色土である。第11層は，旧表土で炭化粒子少量，ローム粒子少量を含む暗褐色土が30～40cm の厚さで帯状に観察することができる。東西の土層を観察してみると，南北土層とほぼ同様の土層である。

3　周溝

周溝は，墳丘部の東側を半周しており，規模は，南北方向で外径21.7m，内径15.6mを測る。上幅は，北部で2.92m，東部で1.90m，南部で2.90m を測り，深さは，北部で72cm，東部で24cm，

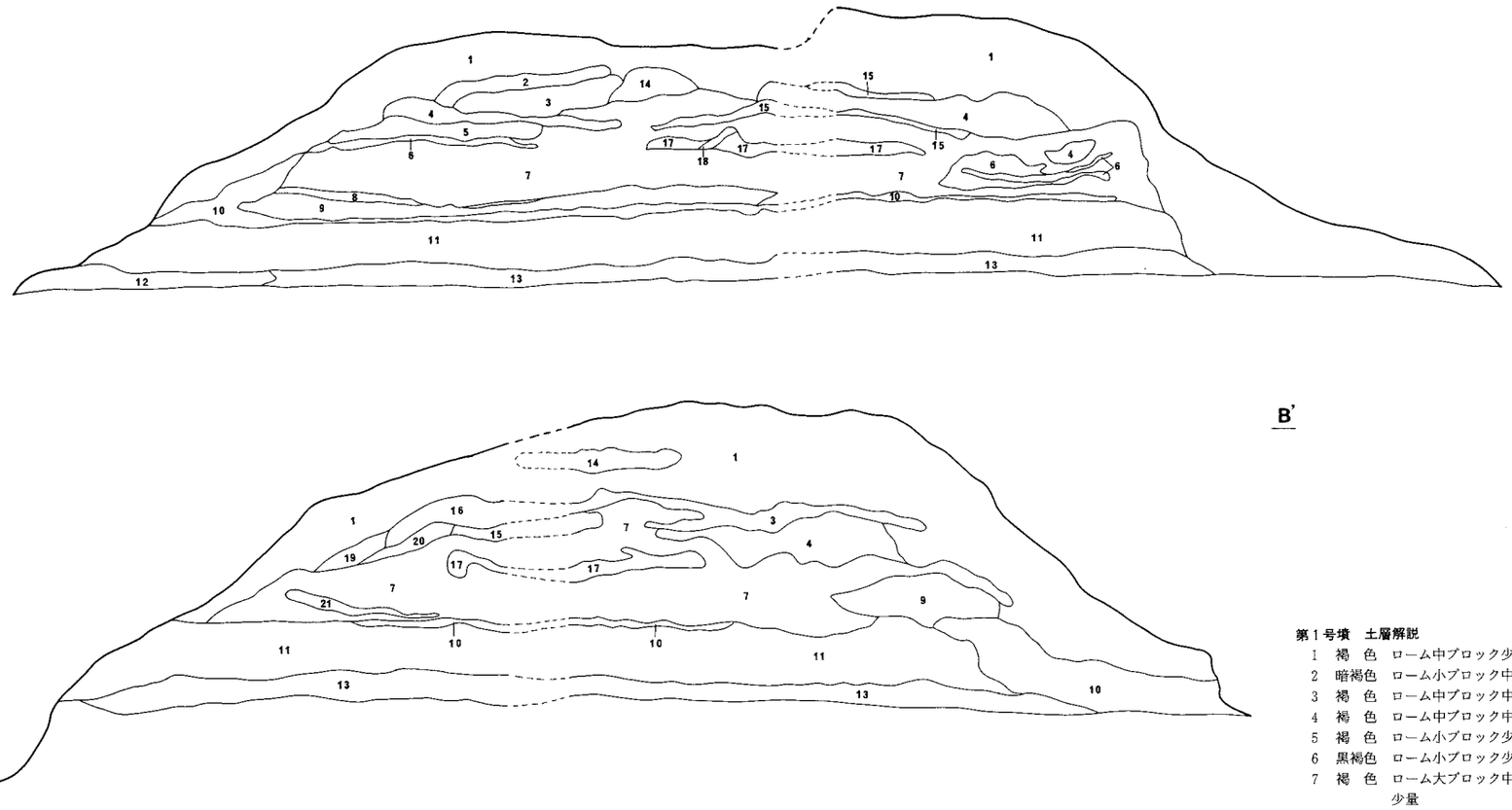
南部で75cm を測り，底面の幅は，北部で1.05m，東部で0.35m，南部で1.25mを測り，北部及び南部は広い。周溝の覆土は，3層からなり，上位の層は，焼土粒子及び炭化粒子を少量，ローム小ブロック及びローム粒子を少量含む締まりの弱い灰褐色土が堆積している。下位の層は，炭化粒子少量，ロームブロック及びローム粒子少量を含む褐色土が堆積している。

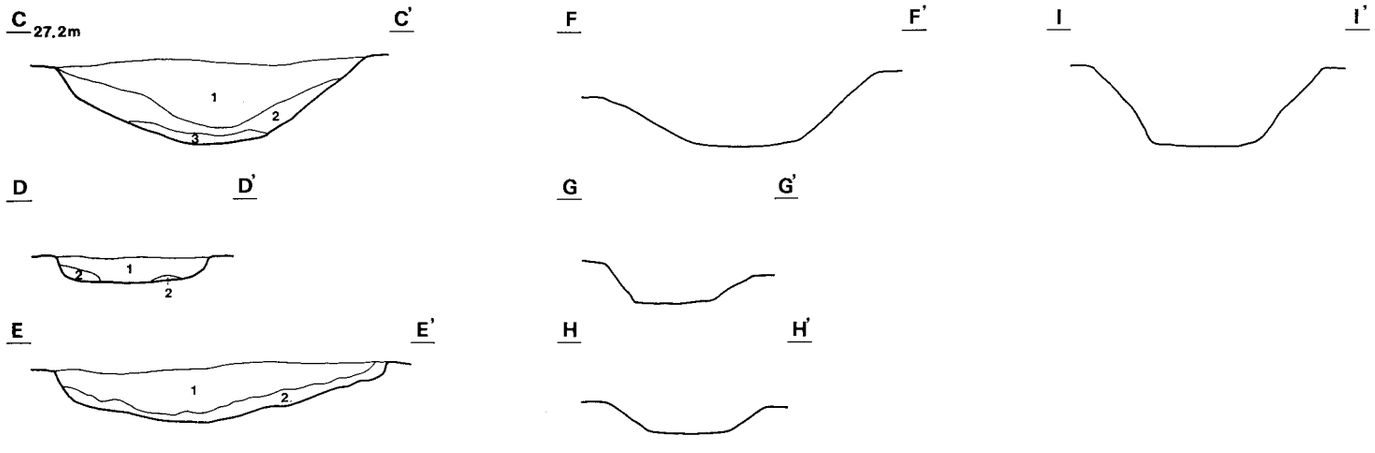


第14図　第1号墳墳丘実測図

4　埋葬施設と遺物の出土状況

埋葬施設は，本古墳が物見櫓の櫓台となっていたので撹乱されていたが，主軸方向はN-22°-Wと推定され，掘り方は墳頂部に東西 [2.50]m，南北 [3.50]mの長方形に，深さ約 [50]cm掘り下げられている。覆土は2層からなり，主にローム粒子を少量含む褐色土からなり，底面は粘性のある褐色土が踏み固められている。北部からは，長径約75cm，短径約40cm，厚さ約30cm を測る





第15図　第１号墳墳丘土層断面図

第１号墳　土層解説

1　褐　色　ローム中ブロック少量
2　暗褐色　ローム小ブロック中量，炭化粒子微量
3　褐　色　ローム中ブロック中量，炭化粒子微量
4　褐　色　ローム中ブロック中量
5　褐　色　ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
6　黒褐色　ローム小ブロック少量，炭化粒子少量
7　褐　色　ローム大ブロック中量，ローム中ブロック・炭化粒子少量
8　黒褐色　焼土粒子少量，炭化粒子少量，ローム粒子微量
9　暗褐色　焼土小ブロック・炭化物・ローム中ブロック少量
10　褐　色　ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
11　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量
12　褐　色　炭化粒子微量
13　褐　色　炭化粒子少量
14　明褐色　ローム大ブロック中量，炭化粒子少量
15　褐　色　炭化粒子・ローム小ブロック中量
16　褐　色　ローム小ブロック中量，炭化粒子少量
17　褐　色　ローム大ブロック中量，ローム中ブロック少量，炭化粒子微量
18　明褐色　ローム大ブロック多量
19　明褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック少量
20　明褐色　ローム粒子・ローム中ブロック少量，炭化粒子微量
21　褐　色　ローム大ブロック中量，炭化物少量

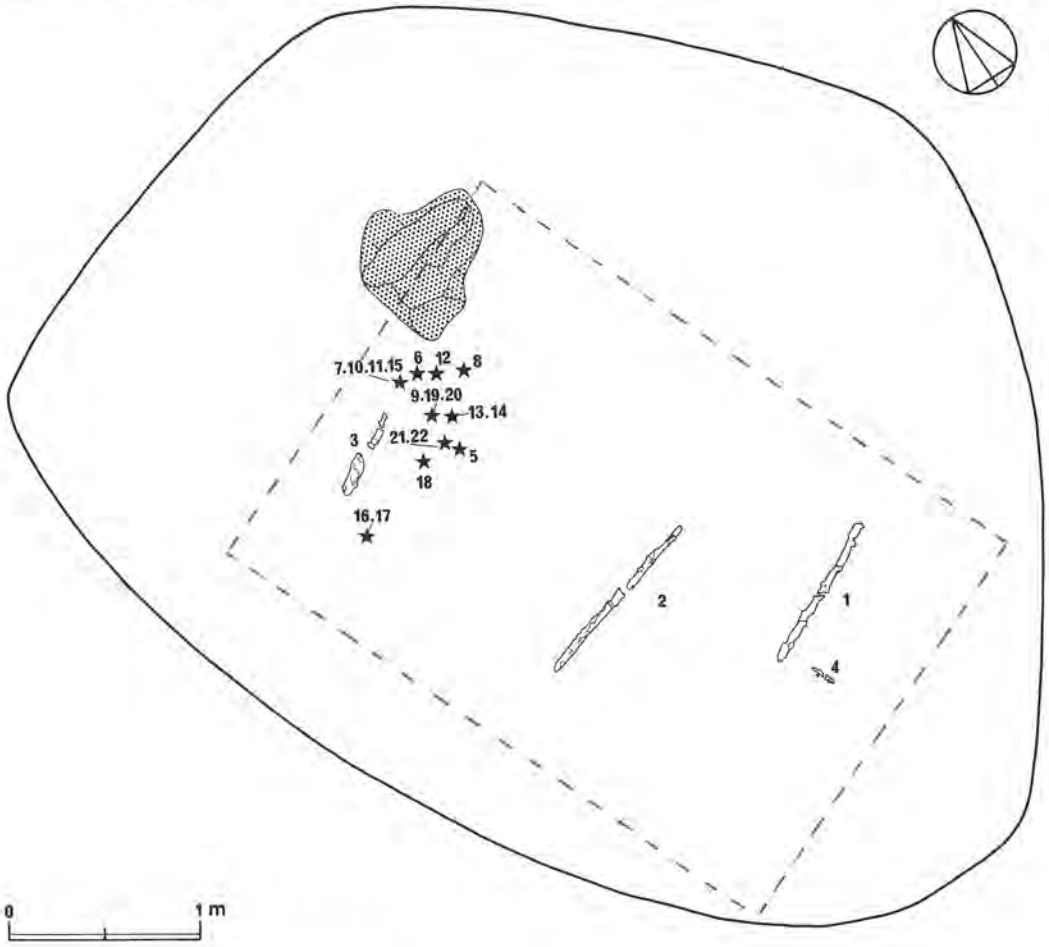
周溝　土層解説

1　灰　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・ローム小ブロック少量
2　褐　　色　炭化粒子・ローム粒子・ローム中ブロック少量
3　にぶい褐色　ローム中ブロック中量，ローム粒子少量

0　2m

粘土ブロックが出土している。埋葬施設は木棺直葬と思われるが，粘土ブロックの周辺や底面からは木棺の痕跡は確認されていない。

副葬品は，埋葬施設から直刀２口，剣１口，刀子１点，鉄鏃18点がほぼ標高29.0mから出土している。直刀１は，埋葬施設の南東部中央付近から，鋒を南西に向けて出土している。北西約85cmからは直刀２が，南18cmからは刀子が出土している。直刀２は，埋葬施設の中央部からやや西寄りに，鋒を南西方向に向けて出土している。南東約85cmからは直刀１が出土している。剣は，埋葬施設の北西部，鋒を南西方向に向けて出土している。南約1.40mからは直刀２が，東約10cmからは鉄鏃が出土している。刀子は埋葬施設の南部中央付近，鋒を南方向に向けて出土している。北18cmからは直刀１が出土している。鉄鏃は，埋葬施設の北部中央付近から重なり合うように出土している。西約10cmからは剣が出土している。直刀１，２は，ほぼ全長を確認できるが，直刀１は四つに，直刀２は二つに折れて出土している。剣は，腐食によって鋒が欠損し，三つに折れて出土している。刀子は，二つに折れ鋒は欠損して出土している。



第16図　第１号墳墳丘出土遺物状況図

5　遺物

主な出土遺物を解説し，他は観察表で表した。

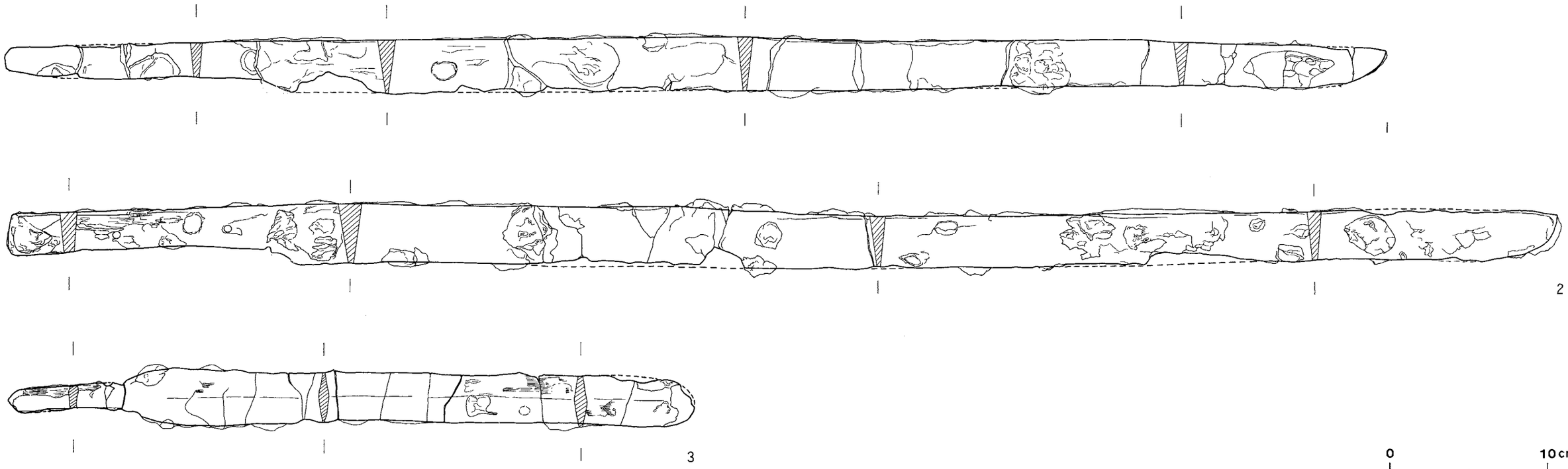
直刀１（第17図）は，C3e$_2$区の埋葬施設底面の南東部中央付近から，鋒を西方向に刃を南方向に向け四つに折れて出土している。出土地点の標高は28.98mを測る。本刀の造りは，平造りの直刀で，棟は角棟で，内反り気味である。鋒は「フクラ」が付き，関の部は棟関はなく，刃関は腐食して確認できない。茎部は，長さ16.5cmで，茎の幅は，元より茎尻に向かってやや狭くなっている。目釘穴は肉眼では確認されていないが，遺物Ｘ線撮影によると，元から４cmのところと，茎尻から６cmのところに２か所確認され，両目釘穴は直径５㎜である。

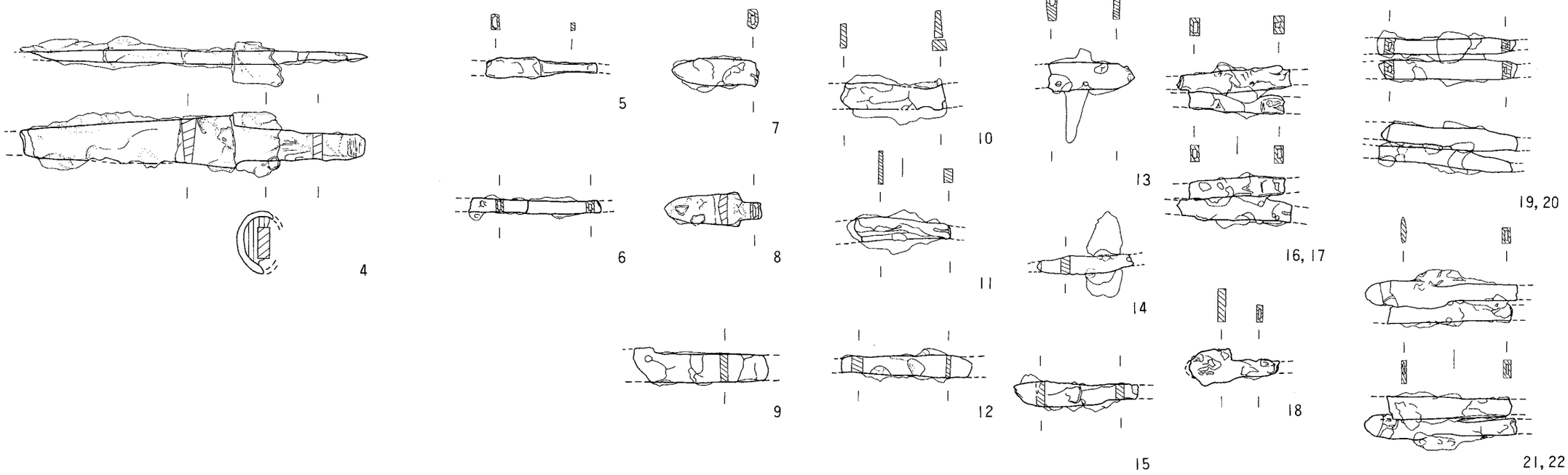
直刀２（第17図）は，埋葬施設底面の中央部からやや西寄りに，鋒を西方向に，刃を北方向に向け二つに折れて出土している。出土地点の標高は，29.03mを測り，本直刀の造りは，平造りの直刀で，棟は角棟で，内反り気味である。鋒は「フクラ」が付き，関の部分は棟関はなく，刃関は腐食が激しいが，刃部からほぼ115°で1.5cmの長さをもって茎に至っているものと思われる。刀装具は出土しなかった。茎部は，長さ17.1cmで，茎の幅は元から中央に向かって狭くなり，茎尻に向かってはやや広がっている。目釘穴は，元から３cmのところと茎尻から７cmのところに２か所確認され，両目釘穴は直径５㎜である。本刀に伴う刀装具は，出土しなかった。

剣（第17図）は，C3d$_1$区の埋葬施設底面の北西部から，鋒を南西方向に向けて三つに折れて出土している。出土地点の標高は,28.98mを測る。本刀の造りは，剣形で反りは無く，鋒に向かって身幅が狭くなっている。鋒は，先端は欠損しているが「フクラ」が付いている。関は両関で，刃部からほぼ113°の角度で1.2cmの長さをもって茎に至っている。茎は，元から茎尻に向かって幅がやや狭くなっており，茎尻は栗尻となっている。目釘穴は肉眼では確認されていないが，遺物Ｘ線撮影によると，茎尻から4.8cmのところに確認され，直径３㎜である。

刀子（第17図）は，C3e$_2$区の埋葬施設底面の南部中央付近から鋒を南方向，刃部を西方向に向けて出土している。出土地点の標高は,28.92mを測る。本刀子は，鋒は欠損し，刀身は薄手で腐食が進んでいる。本刀子は，反りはなく，棟は角棟で，棟関は，刃部からほぼ93°で0.1cmの長さをもって茎に至り，刃関は，ほぼ121°で0.15cmの長さをもって茎に至っているものと思われる。茎幅は元から茎尻に向かってやや狭くなっており，目釘穴は確認されていない。鞘の一部が遺存している。

鉄鏃（第17図）は，C3d$_2$区の埋葬施設底面の北部中央付近から重なり合って18点出土している。出土地点の標高は，28.98～29.03mを測る。剣の東側の径１mの範囲から出土している。これらの鉄鏃は，完形で出土しているものは無く，鏃身や茎部のみのものが多く，形状は，鏃身部は柳葉式の形状を表し，頸部は長頸である。関は，両関で茎部に至っており，茎は，四角形で，茎尻に至るに従いやや細くなっている。茎部に木質が遺存しているものも少量ある。





第17図　第１号墳墳丘出土遺物実測図

第１号墳出土遺物観察表（第17図）

（単位：cm）

図版番号	器　種	全　長	刀身長	刀身幅		関　幅	茎　長	茎　幅		備　考
				先　幅	元　幅			先　幅	元　幅	
1	直　刀	87.9	71.4	2.7	3.4	0.5	16.5	1.9	2.3	M1 ほぼ完形
2	直　刀	98.1	81.0	(3.0)	3.6	0.6	17.1	2.7	2.7	M2 ほぼ完形
3	剣	(45.3)	(35.5)	2.9	3.5	0.4	8.0	1.4	1.5	M3 ほぼ完形
4	刀　子	(13.5)	(8.3)	(1.0)	(2.6)	0.4	(5.2)	0.9	1.2	M4 ほぼ完形

（　）内は現存値

（鉄鏃観察表）

（単位：cm）

図版番号	全　長	鏃身長	鏃　身　幅			関　幅	茎　長	鏃身重	備　考
			先　幅	中　幅	元　幅				
5	(4.4)	(2.2)	—	0.7	0.8	0.2	(2.2)	(2.2)	M 5 欠損
6	(5.1)	(4.4)	—	0.5	0.4	—	0.7	(3.1)	M 6 〃
7	(3.4)	(2.7)	(0.9)	0.9	—	—	—	(3.9)	M 7 〃
8	(3.8)	(2.9)	1.0	1.0	1.3	0.2	(0.9)	(2.4)	M 8 〃
9	(5.3)	(5.3)	1.3	1.2	—	—	—	(5.3)	M 9 刀子 〃
10	(4.1)	(4.1)	1.0	1.0	—	—	—	(7.9)	M10 〃
11	(3.8)	(3.8)	0.6	0.6	—	—	—		M11 〃
12	(5.1)	(5.1)	0.8	0.9	0.8	—	—	(3.3)	M12 〃
13	(3.3)	(3.3)	0.9	1.0	—	—	—	(6.1)	M13 〃
14	(3.9)	—	—	—	—	0.2	1.2		M14 〃
15	(4.8)	3.5	0.8	0.8	0.7	0.3	(1.3)	(3.6)	M15 〃
16	(4.9)	(4.9)	—	0.8	—	—	—	(7.8)	M16 〃
17	(3.7)	(3.7)	—	0.7	—	—	—		M17 〃
18	(3.7)	(1.8)	1.0	1.2	1.2	0.2	(1.9)	(3.4)	M18 〃
19	(5.4)	(5.4)	—	0.6	—	—	—	(8.2)	M19 〃
20	(5.4)	(5.4)	—	0.8	—	—	—		M20 〃
21	(5.9)	(5.9)	1.0	0.7	—	—	—	(9.3)	M21 〃
22	(4.8)	(4.8)	—	0.7	—	—	—		M22 〃

（　）内は現存値

6　まとめ

本墳の埋葬施設は，粘土ブロックが１か所しか検出されていないことや，後世の梶山城跡の櫓台としての使用による撹乱を受けていることなどから，明確に確認できないが木棺直葬であったと考えられる。本墳の時期については，推定であるが埋葬施設の位置及び副葬品等から古墳時代後期初頭の年代が考えられる。

第5節　土坑

当調査区からは，14基の土坑が検出されている。遺物は，覆土上層から数片出土しているが，流れ込んだものと思われ，時期や性格を明らかにするまでには至らなかった。以下のとおり，一覧表に掲載し，第1号～7号土坑は，実測図で示した。

表2　土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	$A2j_6$	N-22°-E	隅丸方形	1.84 ×(1.82)	57	緩斜	鍋底状	自然		粘土貼
2	$B2b_6$	N-27°-E	隅丸方形	1.82 × 1.67	20	緩斜	皿状	自然		粘土貼
3	$B2b_6$	N-49°-W	隅丸長方形	1.95 × 1.37	25	緩斜	皿状	自然		粘土貼
4	$A2j_5$	N-46°-W	不定形	(2.79)× 0.89	61	緩斜	鍋底状	自然		
5	$B2b_6$	N-22°-W	不整円形	1.43 × 1.23	25	緩斜	皿状	自然		
6	$A2j_7$	N-16°-W	不整円形	1.12 × 1.10	43	垂直	凹状	自然		
7	$B2a_7$	N-47°-W	円形	0.88 × 0.80	44	外傾	凹凸	自然	土師器（甕）片8	
8	$C3f_5$	N-68°-E	楕円形	1.94 × 1.19	17	緩斜	皿状	自然		
9	$C3i_6$	N-43°-E	不整長方形	2.50 × 1.26	49	緩斜	凹凸	自然		
10	$D3a_7$	N-25°-W	円形	0.90 × 0.80	34	垂直	凹凸	自然		
11	$C3i_8$	N-39°-E	楕円形	1.59 × 1.12	46	緩斜	傾斜	自然		
12	$D3b_9$	N- 4°-W	長楕円形	2.62 × 1.20	38	外傾	凹凸	自然	土師器（甕）片1	
13	$D3f_9$	N-12°-W	不整円形	1.48 × 1.47	36	緩斜	凹凸	自然		
14	$C3j_7$	N-79°-E	長方形	1.93 × 1.37	37	緩斜	凹凸	自然	土師器（甕）片1	

第6節　溝

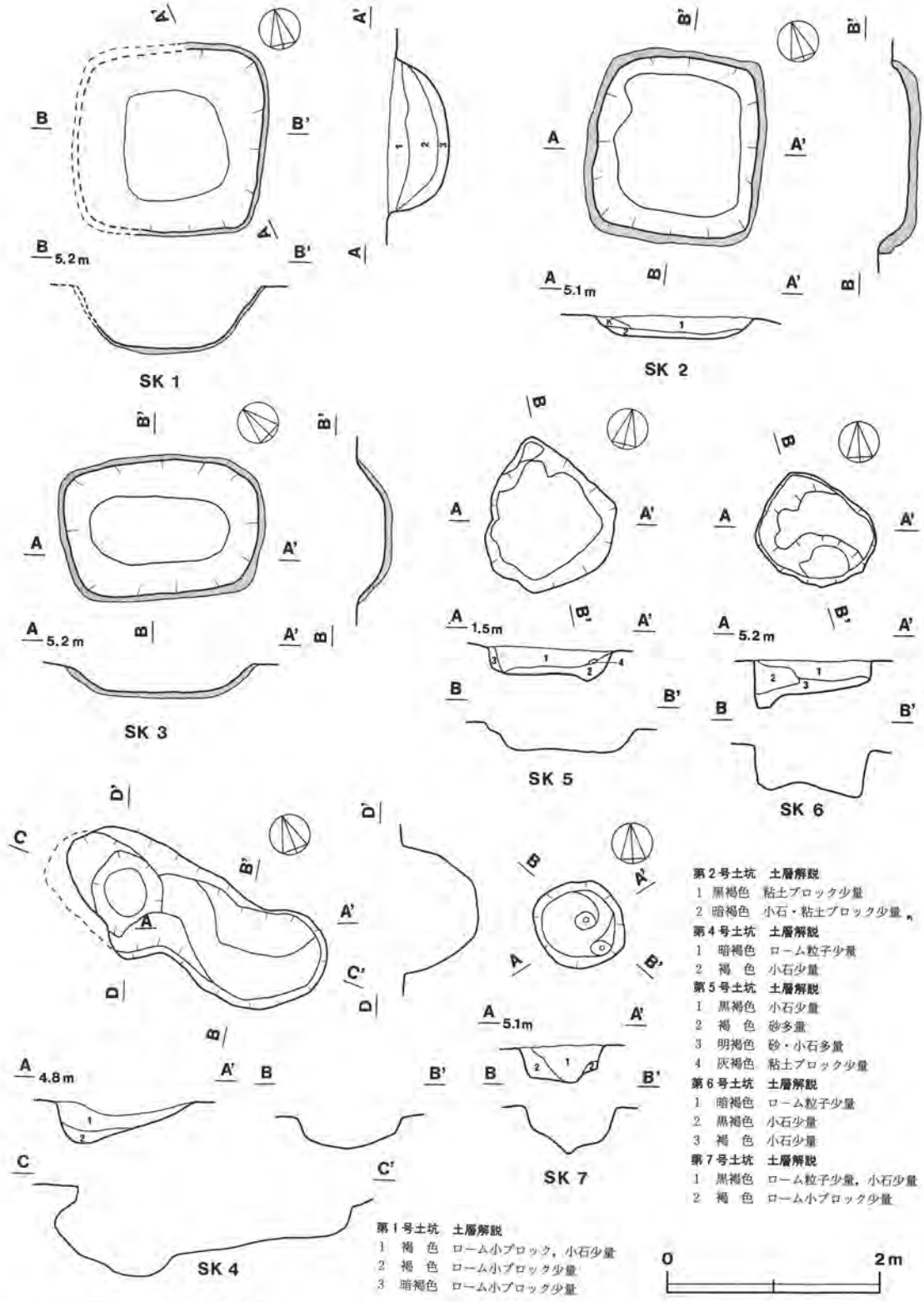
当調査区からは，3条の溝が検出されているが，いずれも出土遺物がないため，それぞれの溝の構築時期や性格を明らかにすることは困難であった。ここでは調査結果に基づき，それぞれの溝の規模や形状等を記載する。

第1号溝（第19図）

位置　調査区の中央部，$C3d_4$区から$C3j_5$区に確認されている。

重複関係　$C3d_4$区で第1号墳の周溝を掘り込んでいる。

規模と形状　全長は21.7mであり，上幅0.82～1.24m，下幅0.28～0.72m，深さ16～28cmを測る。底面は平坦であり，壁は緩やかに立ち上がっている。断面形は皿状を呈している。



第18図　第1～7号土坑実測図

方向　C3d$_4$区から南東方向（S－18°－E）へ8m程ほぼ直線的に延び，さらにC3f$_5$区から南東方向（S－3°－E）へ13.7m程ほぼ直線的に延びている。

覆土　自然堆積。

所見　本跡は，古墳より新しい時期に構築された溝と考えられる。しかし，詳細な時期や性格については不明である。

第2号溝（第19図）

位置　調査区の中央部，C3j$_7$区からD3a$_9$区に確認されている。

規模と形状　全長は6.0mであり，上幅0.65～3.10m，下幅0.56～2.90m，深さ8～13cmを測る。底面はやや凹凸があり，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。断面形は，「⌣」形状を呈している。

方向　C3j$_7$区から南東方向（S－73°－E）へほぼ直線的に延びている。南東端はさらに調査区外へ延びている。

覆土　自然堆積。

所見　本跡は出土遺物もなく，詳細な時期や性格については不明である。

第3号溝（第19図）

位置　調査区の中央部，D3d$_8$区からD3f$_8$区に確認されている。

重複関係　D3g$_8$区で第1号堀を掘り込んでいると思われる。

規模と形状　全長は11.9mであり，上幅0.56～0.86m，下幅0.18～0.64m，深さ0.15～0.32mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。断面形は，「∪」形状を呈している。

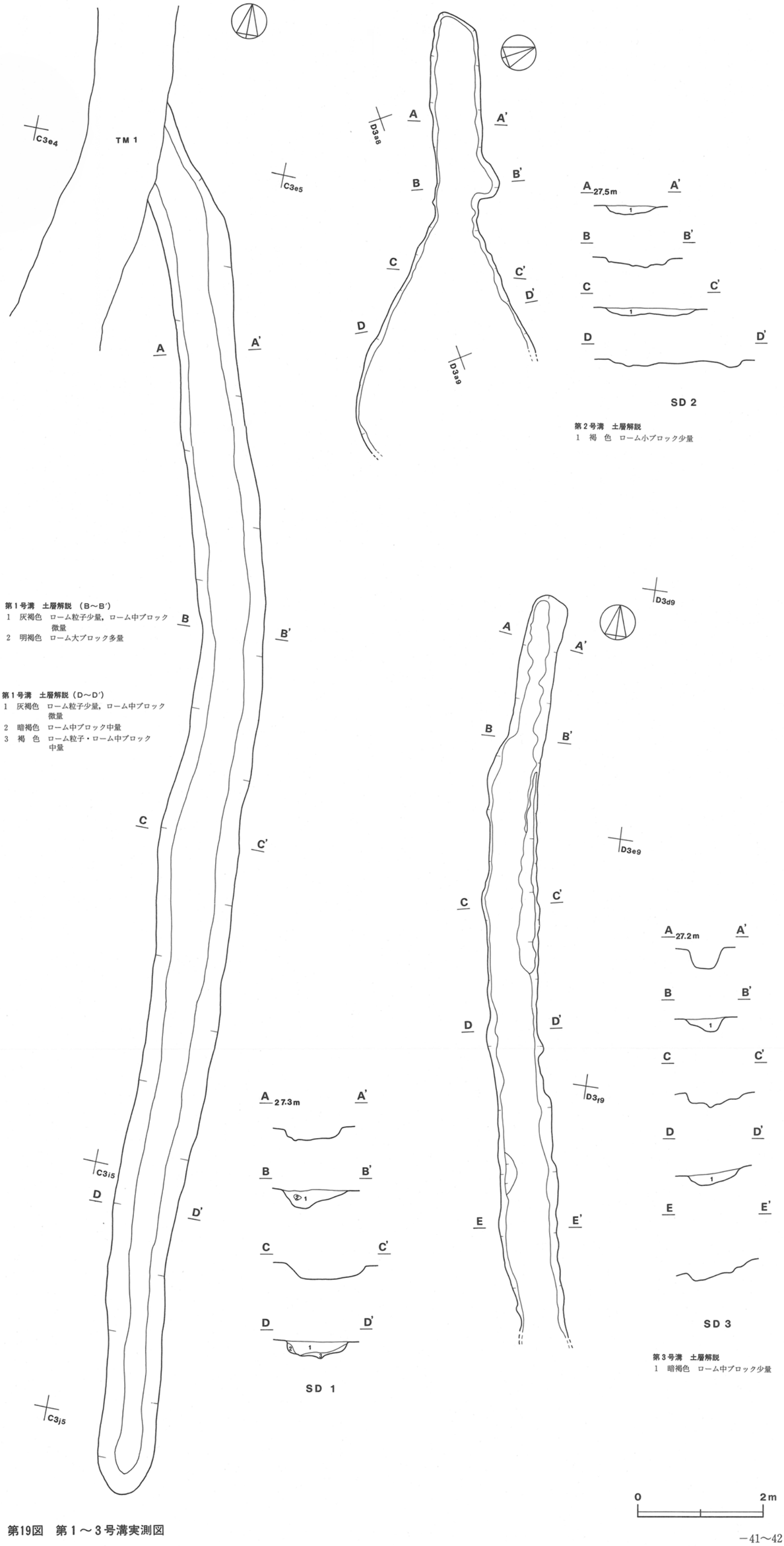
方向　D3d$_8$区から南西方向（S－1°－W）へ4.5m程ほぼ直線的に延び，さらにD3e$_8$区から南東方向（S－12°－E）へ7.3m程ほぼ直線的に延びている。

覆土　自然堆積。

所見　本跡は，出土遺物もなく詳細な時期や性格については不明である。

第7節　遺構外出土遺物

当調査区からは，表土などの遺構外から土器片，土製品，石器・石製品，銅製品が少量出土している。ここでは，これらの出土遺物のうち縄文時代早期から晩期にかけての縄文式土器，縄文時代後期の土偶，弥生時代後期の弥生式土器については，簡単な説明を加え，他の遺物は観察表で記載した。



第19図　第1～3号溝実測図

1　縄文時代

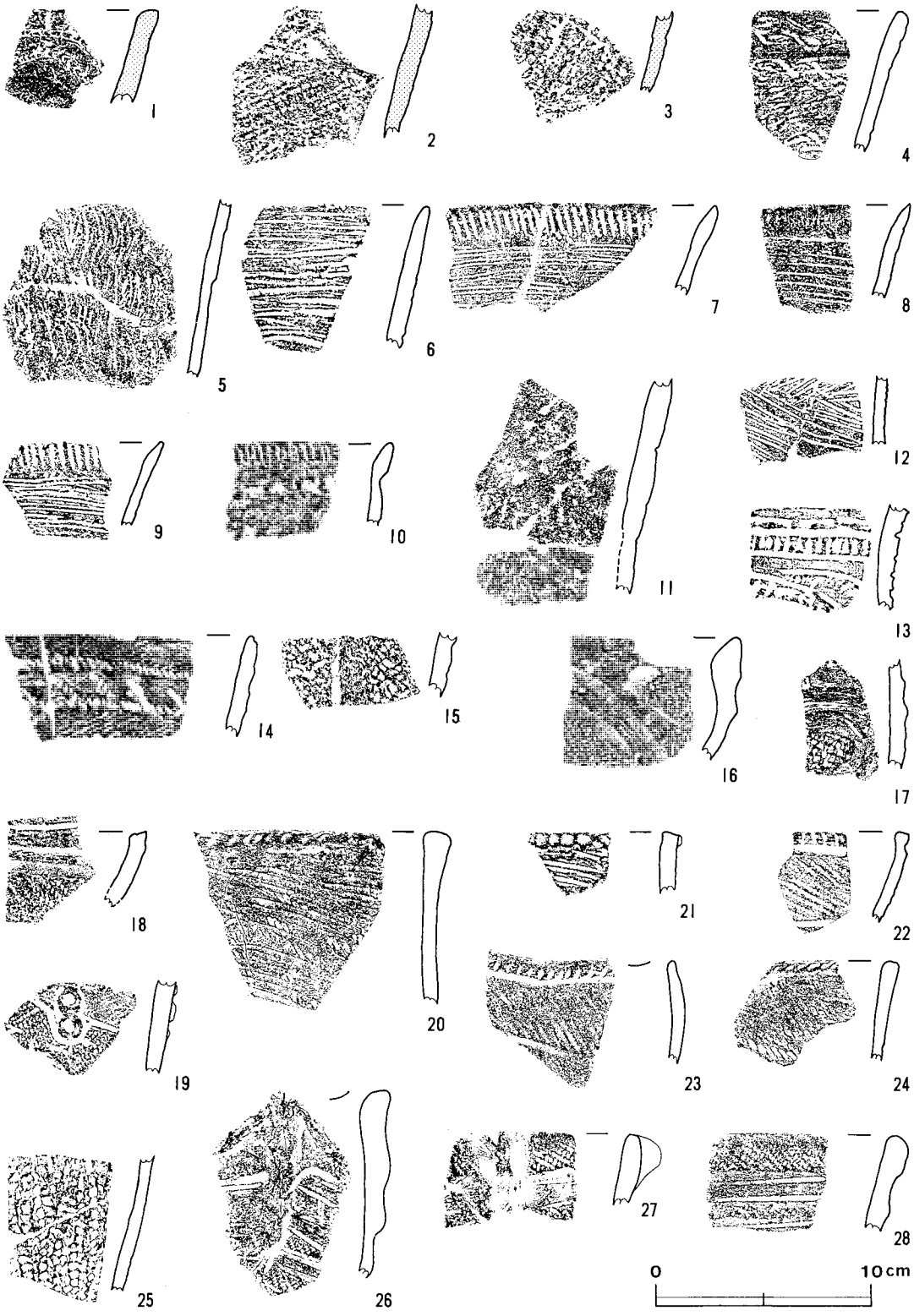
(1)　縄文式土器（第20・21図）

梶山城跡から出土した縄文式土器片の主なものを記載した。

1～3は，胎土に繊維を含む前期前半の黒浜式土器である。1は，口縁部片で半截竹管による円弧文が施されており，2・3は，単節縄文による横回転で縄文が斜位に施されている。4～13は，前期後半の浮島式土器である。4は，口縁部片で波状文が施されており，5は，胴部片で貝殻腹縁による変形爪形文が施されており，6は，口縁部片で横位の沈線が施されている。7～9は，口縁部片で，口縁直下にやや斜位のキザミ目を施し，その下に横位の沈線が施されている。10は，口縁部片で，口縁直下にやや斜位のキザミ目を施し，その下に三角刺突文が施されている。11～13は，胴部片である。11は，斜位の刺突文，12は，斜位の沈線文，13は，横位の太い沈線を施し，その間に櫛歯状工具による文様が施されている。14は，前期末から中期初頭の粟島台式土器である。口縁部片で，縄紐の圧痕文が横位及び斜位に施されている。

15～17は，中期後葉の加曽利E式土器である。15は，胴部片で，懸垂文が施されている。16は，口縁部片，17は，胴部片で，懸垂文間は磨消されている。18は，口縁部片で，隆帯によって口縁部と胴部が区画され，口縁部は無文，胴部は縄文が斜位に施されている。

19は，後期前葉の堀之内式土器である。胴部片で，縄文を地文とし，沈線が施されている。20～25は，後期中葉の加曽利B式土器である。20は，口縁部片で縄文を地文とし，斜位のあらい沈線を施しており，21は，口縁部片で，口唇部直下は角頭状を呈する。口縁部直下に押圧隆帯を横位に貼り付け，下位は縄文を地文とし，沈線文が施されている。22は，口縁部片で，口縁直下に縦位の刺突文，胴部には横位の沈線間に斜位の縄文が施されている。23は，口縁部片で，口縁直下に斜位の刺突文，胴部には横位の沈線間に斜位のあらい沈線が施されている。24は，口縁部片で，口縁直下に斜位のあらい沈線を施し，その下位に斜位のあらい縄文が施されている。25は，胴部片で，斜位の縄文が施されている。26～32は，後期後葉の安行Ⅰ式土器である。26は，口縁部片で，口縁は波状を呈する。口縁に沿って，沈線区画の隆起帯縄文が3段にわたってみられる。27は，口縁部片で，隆起帯縄文に付されている突起貼付文には縦位のキザミが施されている。28は，口縁部片で隆起帯縄文の間に横位の沈線が施されている。29は，口縁部片で，隆起帯縄文間に横位の沈線が施され，さらに縦位の隆帯が施されている。30は，口縁部片で，斜位の縄文が施されている隆起帯間に刺突文が施されている。31は，口縁部片で，口縁外面の隆帯上には縄文が施されており，その下には横位の竹管による連続刺突文及び沈線文が施されている。32は，胴部片で，横位の沈線間に縄文を施し，その下には斜位の沈線文を施している。33は，後期後葉の安行Ⅱ式土器の胴部片で，斜位の縄文が施され隆起帯上にはキザミが施され，さらにその上に押圧された貼瘤が付されている。



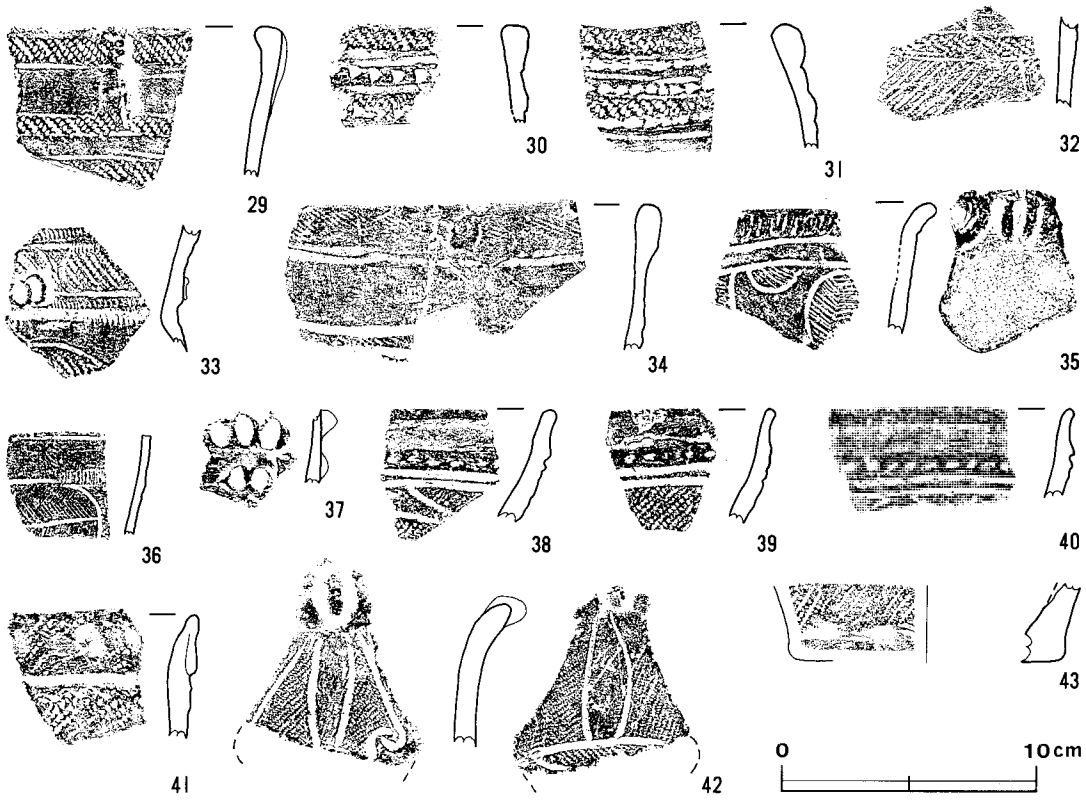
第20図　遺構外出土遺物実測・拓影図(1)

34～37は，晩期前葉の安行III式土器である。34は，口縁部片で，口縁部は隆起帯縄文が施されており，胴部には沈線が施され，沈線間は無文である。35は，口縁部片で，口縁部は斜位の細い沈線が施され，胴部は沈線により区画されている。楕円形に区画された内側には，斜位の沈線が施されている。口縁部内側には，段がみられる。36は，胴部片で，沈線を横位及び楕円状に施し，その区画内に斜位の細かい沈線を施している。37は，胴部片で，押圧した貼瘤が付されている。38～41は，晩期後葉の大洞C式土器で，いずれも口縁部片である。38～40は，口縁部に横位の連続刺突文及び平行沈線を施し，その下は縄文を施し磨消されている。41は，折り返し口縁を呈し，その下に斜位の縄文が施されている。

なお，42は，晩期前葉の安行III式土器の口縁部片で，波状口縁の頂部に3個の突起がみられる。文様は，内・外面に縄文を施し地文としており，その上に沈線による区画を施し，区画内を磨消している。このことから，土製品とも思われる。

(2)　土偶（第23図）

$B2b_7$区の地表面から約50cm下（標高 6.7m）の砂層から仰臥の状態で出土している。頭部，腕部及び左脚部を欠損している。形状は，胴部はくびれ，腰部は大きく張り出し，下腹は大きく膨らみ，妊娠している状態を表現している。脚部は直線的に多少開いた形態を示し立体的である。



第21図　遺構外出土遺物実測・拓影図(2)

全体に横位及び斜位の沈線を施している。形状から，縄文時代後期中葉の加曽利B式期に比定されるものと思われる。

2　弥生時代

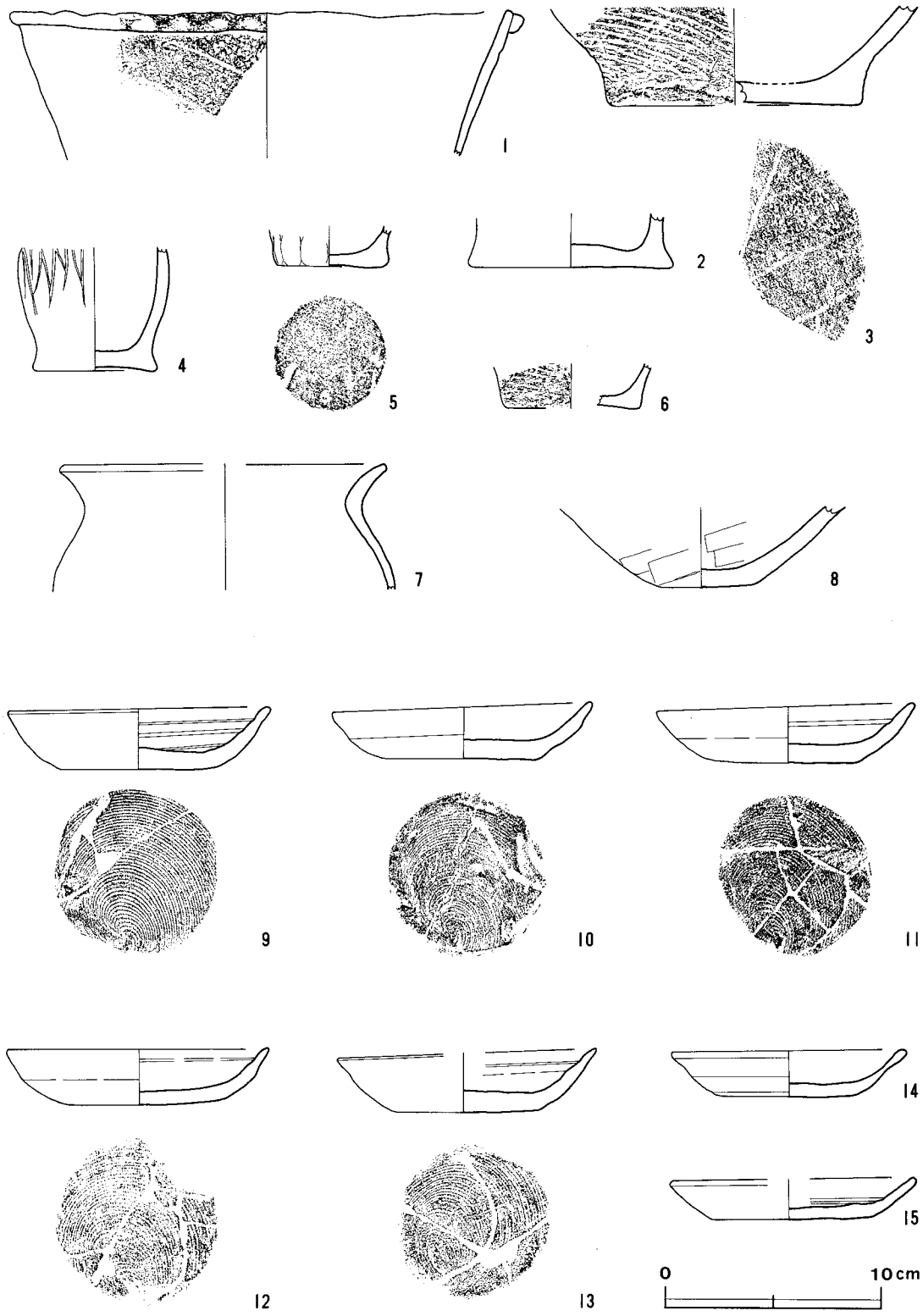
(1)　弥生式土器（第21図）

43は，十王台式土器以前の土器の底部片で，付加条2種の縄文を羽状に施している。

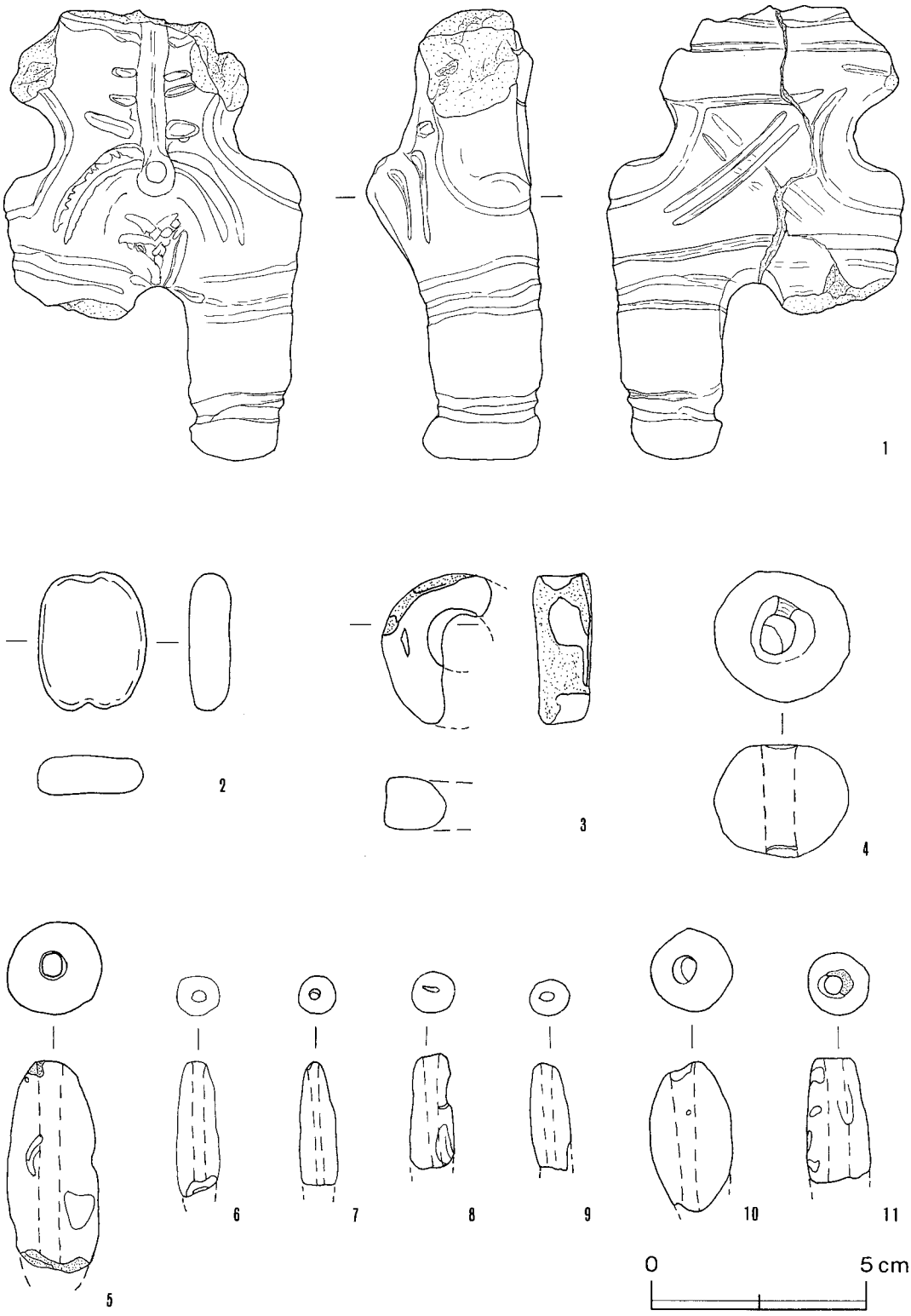
遺構外出土遺物観察表（第22～24図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
1	鉢 縄文式土器	A　22.2 B　(6.7)	胴下半部欠損。胴部は外傾気味に立ち上がる。複合口縁で，棒状工具による波状文を施している。胴部に斜位の縄文及び沈線を施している。	砂粒・スコリア・にぶい赤褐色 普通	P12 20% B2e$_4$,B2c$_4$区
2	甕 縄文式土器	B　(2.5) C　9.5	底部片。底面に網代痕有り。内・外面剝離のため調整不明。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P16 5% B2e$_4$,B2c$_4$区
3	壺 弥生式土器	B　(4.5) C　[11.6]	底部片。平底で，体部は内彎気味に立ち上がる。胴部に付加条1種の縄文が施され，底部には木葉痕有り。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P18 5% 遺構外(表土)
4	壺 弥生式土器	B　(5.7) C　5.5	底部片。胴部は内彎気味に立ち上がる。胴部に斜位の沈線を施している。	砂粒・長石 橙色 やや不良	P15 10% B2d$_6$区覆土上層
5	壺 弥生式土器	B　(1.9) C　5.1	底部片。平底。底部外面，指頭押圧。底面に木葉痕有り。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P19 5% 表採
6	壺 弥生式土器	B　(2.1) C　[6.2]	底部片。平底。底部に付加条1種の縄文が施されている。	砂粒・スコリア・雲母 明赤褐色 普通	P20 5% 表採

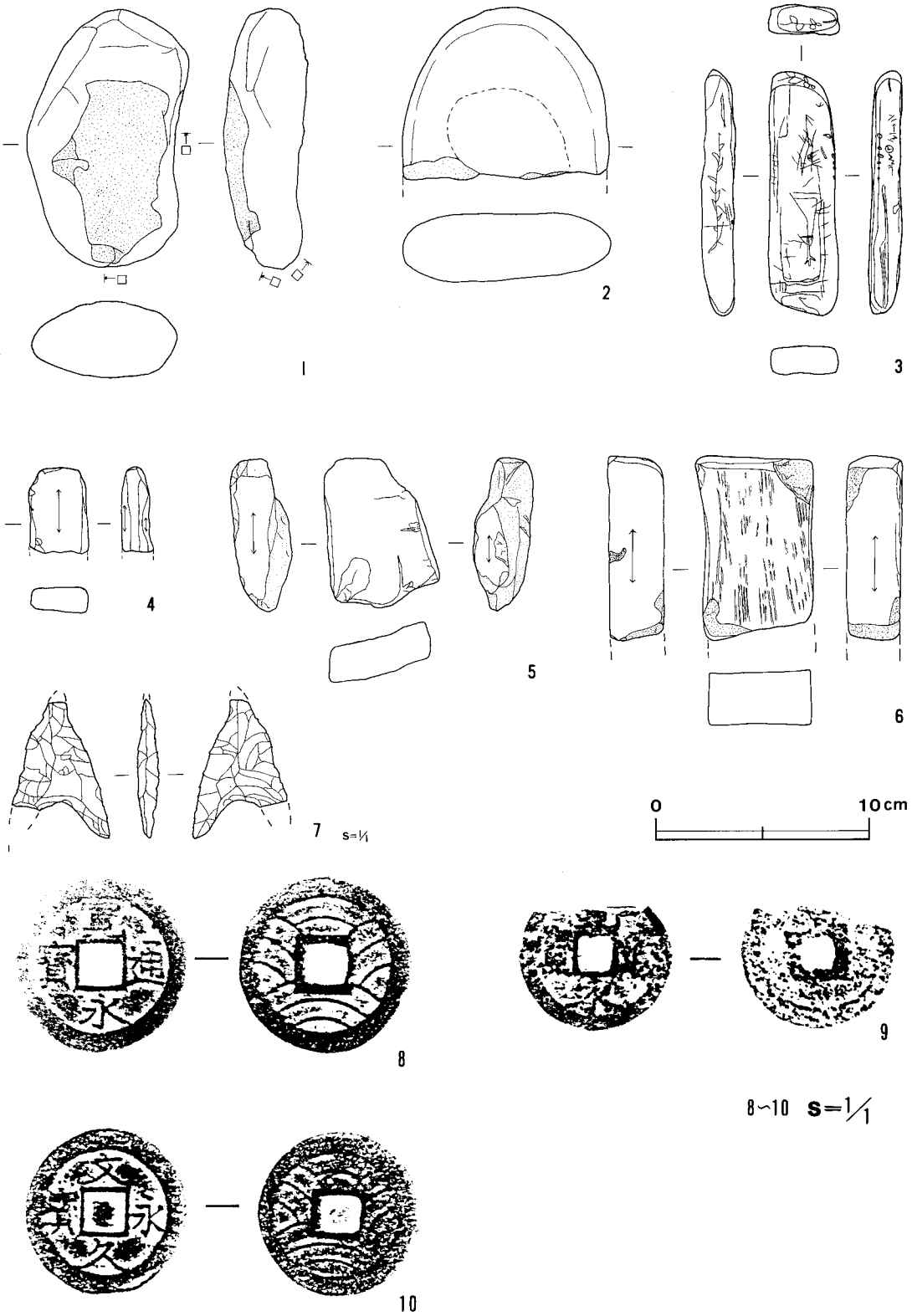
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
7	小形甕 土師器	A　[14.8] B　(5.9)	胴中央部以下欠損。胴部は内彎し，頸部はくびれ，口縁部は外反する。	胴部内・外面剝離のため調整不明。口縁部内・外面ナデ。	砂粒・スコリア 明赤褐色 不良	P 2 5% 遺構外
8	甕 土師器	B　(3.7) C　4.6	底部片。平底で，体部は内彎気味に立ち上がる。	底部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 褐色 普通	P17 5% B2d6区覆土上層
9	皿 土師質土器	A　12.0 B　2.9 C　7.2	平底。底部内面中央に厚味を持ち，体部は内彎気味に立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 7 95% 古墳覆土上層
10	皿 土師質土器	A　12.3 B　2.7 C　7.5	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P 8 95% 古墳覆土上層
11	皿 土師質土器	A　12.0 B　2.8 C　7.3	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	P 9 95% 古墳覆土上層
12	皿 土師質土器	A　12.2 B　2.6 C　7.5	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P10 60% 古墳覆土上層



第22図　遺構外出土遺物実測・拓影図(3)



第23図　遺構外出土遺物実測図(4)



第24図　遺構外出土遺物実測・拓影図(5)

図版番号	器　種	法　量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
13	皿 土師質土器	A　[12.0] B　2.8 C　6.7	平底。底部内面中央に厚味を持ち，体部は内彎気味に立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	P11 60% 古墳覆土上層
14	皿 土師質土器	A　10.7 B　2.2 C　6.6	平底。体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・長石 にぶい橙色 やや不良	P13 80% B2a$_4$区覆土上層
15	皿 土師質土器	A　[11.2] B　1.9 C　7.6	平底。体部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。体部内面に煤付着。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P14 60% B2a$_4$区覆土上層

土製品観察表（第23図）

図版番号	器　種	法　量 (cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備　考
1	土　偶	(10.5)	6.9	4.1		(173.6)	60	B2b$_7$区	DP 8
2	土器片錘	3.2	2.5	0.9		8.9	100	B2d$_6$区	DP 1
3	管状耳飾	(2.6)		1.3	(1.2)	(7.7)	45	トレンチ	DP11
4	球状土錘	2.1	3.7		0.9	21.5	100	B2d$_6$区	DP 2
5	管状土錘	(5.0)	2.2		0.7	(19.5)	90	C3j$_8$区	DP 3
6	管状土錘	(3.1)	1.0		0.3	(1.9)	80	B2a$_4$区	DP 4
7	管状土錘	(2.9)	0.9		0.3	(1.6)	80	B2d$_6$区	DP 5
8	管状土錘	(2.2)	1.0		0.4	(2.1)	70	B2d$_6$区	DP 6
9	管状土錘	(2.5)	1.0		0.4	(1.2)	70	表　採	DP 7
10	管状土錘	(3.5)	1.9		0.5	(7.8)	80	表　採	DP 9
11	管状土錘	(2.9)	1.5		0.5	(4.8)	60	表　採	DP10

石器　石製品観察表（第24図）

図版番号	器　種	法　量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量 (g)	石質	出土地点	備考
1	敲　石	12.2	7.7	3.6	(451.8)	砂岩	B2d$_6$区	Q 1
2	磨　石	(8.2)	9.7	3.3	(387.6)	安山岩	B2d$_6$区	Q 2
3	板　碑	11.6	1.7	3.3	104.2	滑石	B2d$_6$区	Q 3
4	砥　石	(4.0)	2.8	1.5	(22.2)	凝灰岩	B2c$_4$区	Q 4
5	砥　石	(7.2)	2.3	5.4	(87.5)	砂岩	B2e$_4$区	Q 7
6	砥　石	(8.7)	2.7	5.5	(226.5)	凝灰岩	表採	Q 6
7	石　鏃	(2.2)	(1.6)	0.3	(0.6)	チャート	B2e$_4$区	Q 5

梶山城跡出土古銭観察表（第24図）

図版番号	銭　名	初鋳年	鋳造地名	出土位置	備　考	台帳番号
8	寛永通寶	寛文8年（1668）	日　本	B1h$_0$区 覆土上層	新寛永	M23
9	寛永通寶	寛永3年（1636）	日　本	B2d$_6$区 覆土上層	古寛永	M25
10	文久永寶	文久元年（1861）	日　本	B2a$_4$区 覆土上層		M24

第5章　考　　察

梶山城跡の調査の結果，城跡に係る遺構として調査区内から堀状遺構1条，縦堀1条，土塁2か所，腰郭2か所，虎口1か所，櫓台跡1か所が検出された。本城に伴う遺物は出土していない。古墳は1基検出され，埋葬施設から，直刀2口，剣1口，刀子1点，鉄鏃18点が出土している。本章においては，梶山城跡の構造，歴史的背景，周辺城跡について述べ，次いで古墳の構築時期について述べることとする。

第1節　梶山城跡の構造

中世の城は，一般的に自然の地形を巧みに利用して築城しているが，梶山城跡もこれに類するものと思われる。梶山城跡は，西方向へ張り出した舌状台地の端部に構築されている。城跡は，北側，西側及び南側の三方は急崖で城壁となっており，城跡からは，西側に広がる北浦の湖岸一帯を見下ろすことができる。東側は，台地で地続きとなっている。

現地踏査による城跡の地形の観察や城の概念図を基に，梶山城跡の構造について検討してみると，主郭は，第25図のIIの郭（2）にあたるものと考えられるが，IIの郭（2）は，Iの郭の東側にあり，最大で東西幅約160m，南北幅約170mの規模で「⌐」状を呈し長辺方向はN-100°-Wで，標高約28mを測る。Iの郭はIIの郭の西側に位置し，最大で東西幅約100m，南北幅約210mの規模で「□」状を呈し，長辺方向はN-25°-Wで標高約27mを測る。Iの郭とIIの郭の間には，横堀があるものと思われ，縦堀（8）の延長の南東方向に上幅3～4mの横掘が確認できる。本城は，ほぼ同時期に築城されたものと考えられる中居城（大洋村），小高城（麻生町）と同様に，舌状台地の先端部に土塁囲みの郭を配置し，順次郭を増築していく形式がとられている。

次に，今回調査したIの郭について述べてみたい。Iの郭は，IIの郭の西側に所在し，北・西・南は急崖で城壁である。Iの郭の北・西・南側の城壁の上端部には，土塁（4）が築かれ，その内側に並行して堀状遺構（3）が構築されている。堀状遺構の北西端は，縦堀（5）に続いている。本遺構は，手賀城（玉造町）に類例を求めることができ堀底を兵が歩く通路，あるいは排水路の機能ではないかと思われる。縦堀（5）は，外敵を二分し壁斜面での横への移動を困難にする機能をもっているものと思われる。Iの郭の西コーナー壁斜面部に確認された縦堀の南側斜面部の上・下位には，腰郭(6)，(7) が設けられ，さらにIの郭の南コーナー壁斜面部の上位に腰郭(14)が確認でき，北西端には虎口への細い道が隣接している。Iの郭の南東壁南東寄りには，土塁(4)，(10) が喰違いになっており，虎口と考えられる。この虎口の構造は「⌐¬」形状になっており，Iの郭内へ入る外敵が南側斜面からいっきに侵入できない構造となっている。(13)は，物見の櫓

台で，Ⅰの郭西端部の第１号墳（13）を利用して構築していたと思われ，古墳の墳頂部が削平されている。この櫓台からは，当時北浦の水上交通の監視や対岸の北浦村からの外敵侵入をいち早く察知できたものと思われる。Ⅱの郭の東側は，台地が続いているため，敵方からの攻撃に対して最も弱い部分なので，横堀により外敵の侵入を防ぎ，城外には，武家の屋敷等を設けていたのではないかと思われる。また，明治29年の梶山地区の地籍図には，本郭の南西側及び南東側の低地の地名が「中宿」とあり，近世においては，武家屋敷等が所在していたことも考えられる。

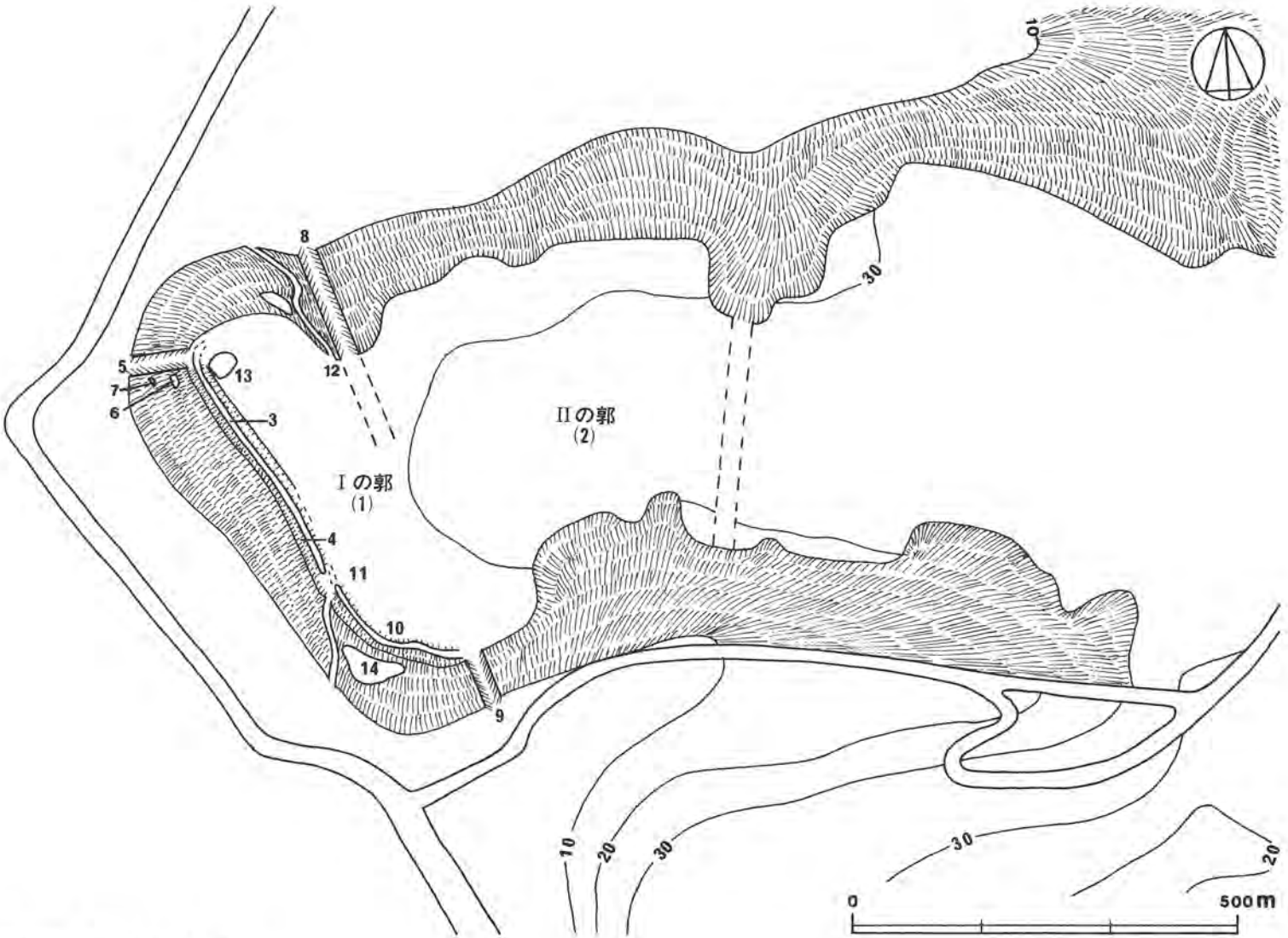
第２節　梶山城跡の歴史的背景

新編常陸国誌をみると，「中世大掾氏ノ氏族コヽニ居り，梶山氏トナル」とあり，梶山氏は大掾氏の支族である。12世紀から16世紀にかけて，鹿島郡のほぼ全域に権勢を誇ったのは，大掾氏一族の鹿島氏とその流れをくむ豪族である。梶山氏の盛衰を知り，鹿島郡の勢力をみる上で，鹿島氏の系譜をたどってみると，常陸大掾氏の一族の吉田清幹の三男成幹が鹿島に住み，地頭となって鹿島氏と称したのが大掾氏一族の鹿島氏の始まりである。成幹の三男政幹は，鹿島三郎と称し鹿島氏を継ぎ，養和３年（1181年）鹿島社総追捕使を命じられている。その鹿島政幹の第三子時幹は，中居四郎と称して1200年頃中居に居住し，中居氏となった。梶山氏は，中居時幹の第二子時家が梶山二郎と称して，梶山に住んで地頭となったのが始まりとされている。なお，時家が梶山に住むようになったのは，中居時幹の孫幹村が弘安９年（1286年）鹿島大使役に任ぜられていることを考えると，13世紀頃ではないかと考えられる。その後，子孫の梶山幹継は応永３年(1396年）掃部介に任じられている。幹継の行状について，鹿島文書には，応永３年（1396年）８月25日「鹿島太神官神宮等謹言上」において，幹継が和田権祝大中臣家貞の知行地を押領しようと企らんだことを停止させるため，鹿島神宮の大宮司散位大中臣則重以下９人の家神官達が幕府に訴え出ている「御報」が残されている。幹継は，応永23年（1416年），上杉禅秀の乱に際し前関東管領である禅秀に味方している。烟田文書によると，「（応永）廿四年禅宗に黨シ地除カル」と記されており，翌24年（1417年）敗れて知行地を没収されてしまい，梶山城も廃城となったものと思われる。

以上のことから，梶山城跡は，梶山二郎が住むようになった13世紀前半から，廃城となる15世紀前半にかけて築城されていたものと考えられる。

第３節　梶山城跡と周辺城跡との関連

鎌倉時代から，戦国時代にかけての鹿島郡は，所謂「南方三十三館」と言われるように，大掾



第25図　梶山城跡概念図

氏の支族が知行地を分割して，その土地に定着して城を築き，土地の名を姓として領主となっている。ここでは，梶山城跡の周辺に所在する城跡の位置について概観してみる。

梶山城跡の南方向に位置する城跡をみてみると，梶山城跡から南西方向約1.6kmに中居時幹の三男幹時が築いた阿玉城跡，さらに阿玉城跡から南西方向約 1.7kmに平国香の後裔平繁幹が築いた札城跡，さらに札城跡から西方向約 1.8kmに中居城跡がある。梶山城跡の北方向に位置する城跡をみてみると，梶山城跡から北東方向 2.5kmに常陸武田氏の一族で武田次郎左衛門尉が築いた武田城跡，武田城跡から北西方向約 2.8kmに鹿島親幹の孫徳宿幹秀が築いた烟田城跡がある。さらに，梶山城跡と北浦を挟んだ対岸の城跡をみてみると，常陸武田氏の一族である武田久信が築いた武田城跡が，常陸大掾氏の一族である行方宗幹が築いた玉造城跡，同じく行方平四郎忠幹が築いた麻生城跡が，常陸大掾氏の一族である小高太郎為幹の築いた小高城跡等がある。鹿島郡の城跡の共通点は，いずれも舌状台地の端部で北浦を見渡せる所に築城している。城主の，大部分は大掾鹿島氏の支族か分家である。

主な参考文献（順不同）

(1)　大洋村教育委員会　「大洋村史」　1989年

(2)　阿久津久他　「日本城郭大系第４巻」　1981年

(3)　村田修三　「中世城郭事典」　1987年

(4)　大野村教育委員会　「大野村史」　1979年

(5)　茨城県教育財団　「烟田城跡」　茨城県教育財団文化財調査報告第68集　1991年

(6)　龍ヶ崎市教育委員会　「龍ヶ崎の中世城郭跡」　1987年

第４節　第１号墳の構築時期について

本古墳は，西側の北浦を臨む台地縁辺部突端に構築されている円墳である。本古墳のある梶山古墳群は，前方後円墳９基，円墳18基である(1)。これまでに，梶山古墳群で調査されたものは，昭和57年に調査した円墳(2)１基だけで，本古墳より北東方向約0.5kmに所在し，円頭太刀や須恵器環耳の提瓶などが出土し，６世紀末に構築されたものである。その他，村内には，大峰山古墳群があり，第４号墳は，土師器や須恵器の出土から６世紀末～７世紀初頭に構築されたものである。本節では，遺構の形状及び出土遺物から，梶山城跡の第１号墳の構築時期について述べることとする。

1　遺構の形状

本古墳を県内の類例（表３）と比較すると，立地は，玉造町の大日塚古墳[3]，美浦村の木原台古墳群第１号墳[4]，玉里村の舟塚古墳[5]等と同様に，台地縁辺部や台地上に構築されている。規模的には，岩井市の上出島古墳第１号墳[6]，常陸太田市の幡山古墳第９号墳[7]と同じ位の円墳である。平面形をみると，大峰山古墳群第４号墳及び梶山古墳の円墳に類例が見られ，墳丘部の周りには半周する周溝が巡らされている。埋葬法においては，上出島古墳第１号墳及び大峰山古墳群第４号墳と同様，木棺直葬である。なお，本古墳は，墳丘部西側が堀状遺構に削平されているため円墳としたが，大峰山古墳群第４号墳と，立地場所，構築の形状に極めて似ており帆立貝形古墳の可能性も考えられる。

2　出土遺物

本古墳から出土している副葬品は，直刀２口，剣１口，刀子１点，鉄鏃18点で，全て墳頂部埋葬施設と思われる場所から出土している。直刀は，６世紀前半から中葉に比定される仲山古墳群[9]第３号墳，古墳時代後期初頭に比定される杉崎コロニー古墳群第88号墳[10]，６世紀初頭に比定される三昧塚古墳[11]等から出土している直刀に例をみることができる。鉄鏃は，杉山秀宏氏の分類[12]によると，古墳時代後期に比定することができる[13]。鏃身部は，柳葉式の形状で，茎部が長頸鏃[14]で，幡山古墳，杉崎コロニー古墳群第89号墳，三昧塚古墳に例をみることができる。

以上，出土遺物の直刀及び鉄鏃の類例から，梶山城跡から検出された古墳は，古墳時代後期初頭頃と思われる。

注　参考文献

（１）・（３）～（７）・(11)・(14)　茨城県史編さん委員会原始古代史部会　「茨城県史料　考古資料編　古墳時代」　1974年

（２）　大洋村教育委員会　「梶山古墳報告書」　1981年

（８）　大洋村教育委員会　「大峰山古墳群調査報告書」　1983年

（９）　大子町史編さん委員会　「仲山古墳群３号墳発掘調査報告書」　1988年

(10)　日本窯業史研究所　「杉崎コロニー古墳群」　1969年

(12)　杉山秀宏　「古墳時代の鉄鏃について」　橿原考古学研究所論集第８　1988年

(13)　新納　泉　「古墳時代の研究８　古墳II　副葬品」　雄斐閣出版　1991年

表3　茨城県内の後期前半古墳概況

古墳名	形状	所在地	全長(m)	後円部 直径・長さ(m)	立地	前方 方向	構築法	埋葬法	遺物	備考
梶山	円墳	大洋村	40×40	−	舌状台地 中央部	−	地山整形 盛土	箱式石棺	直刀10，把頭5，刀子1，耳環玉3 玉類多量	梶山古墳報告書 6世紀末〜7世紀初頭
大日塚	前方後円墳	玉造町	40	30	台地縁辺部	西面	地山整形 盛土	横穴式石室	不明	茨城県史料 6世紀初頭
木原台1号	前方後円墳	美浦村	28	13.5	台地縁辺部	北東面	地山整形 盛土	不明	不明	茨城県史料 5世紀後半〜6世紀初頭
舟塚	前方後円墳	玉里町	88	42	台地上	北西面	地山整形 盛土	箱式石棺	把頭3，鉄鏃20，小玉48， ガラス玉11　他	茨城県史料 6世紀中葉
上出島1号	円墳	岩井市	14×16.5	−	尾根上舌状 台地上	−	地山整形 盛土	木棺直葬	直刀1	6世紀初頭
幡山9号	円墳	常陸太田市	15×14	−	台地上 西端	−	地山整形 盛土	竪穴式石室	把頭1，金環1，刀子1，鉄鏃1， 勾玉7　他	茨城県史料 5世紀
三昧塚	前方後円墳	玉造町	85	48	低地	北面	地山整形 盛土	箱式石棺	太刀3，刀子4，鉄鏃210，短甲1， 挂甲2，金銅冠1　他	茨城県史料 6世紀初頭
芦間山	前方後円墳	下館市	90	50	沖積地 台地上	南東面	地山整形 盛土	不明	不明	茨城県史料 6世紀前半

結　　語

主要地方道茨城鹿島線道路改良工事に伴い，大洋村に所在する梶山城跡の発掘調査は，平成３年４月から同年９月にかけて実施された。

調査の結果，中世の梶山城跡に係わる遺構として堀状遺構１条，縦堀１条，土塁２か所，腰郭２か所が検出されている。梶山城は，13世紀前半から15世紀前半にかけて当地方を支配した梶山氏の本拠地であり，自然地形を巧みに利用して築城した中世城跡の様相を今に伝えている。その他，弥生時代後期の竪穴住居跡２軒，古墳時代前期の竪穴住居跡１軒，古墳時代後期の古墳１基，土坑14基，溝３条が検出されている。

出土遺物は，梶山城跡に直接係わる遺物は出土していない。第１号墳からは，直刀２口，剣１口，刀子１点，鉄鏃18点が出土している。その他，縄文式土器片，弥生式土器片，土師器片，土製品，石器・石製品が覆土から少量出土している。

今回の調査は，道路幅という限定された範囲の調査であったが，梶山城跡に係わる遺構を検出できたこと，当村における弥生時代後期の住居跡が初めて検出されたこと，十王台式土器の出土により当時の文化交流を確認できたことなど一応の調査成果を上げることができた。本報告書が，当地域の歴史を解明するための研究資料として活用されれば幸いである。

なお，本報告書をまとめるにあたり，大洋村教育委員会をはじめ，関係各位から多くの御指導，御協力を頂いたことに対し，心から感謝の意を表したい。

写　真　図　版

梶山城跡全景

第２号堀(縦堀)

第１号住居跡遺物出土状況

第３号住居跡

第１号墳遺構確認

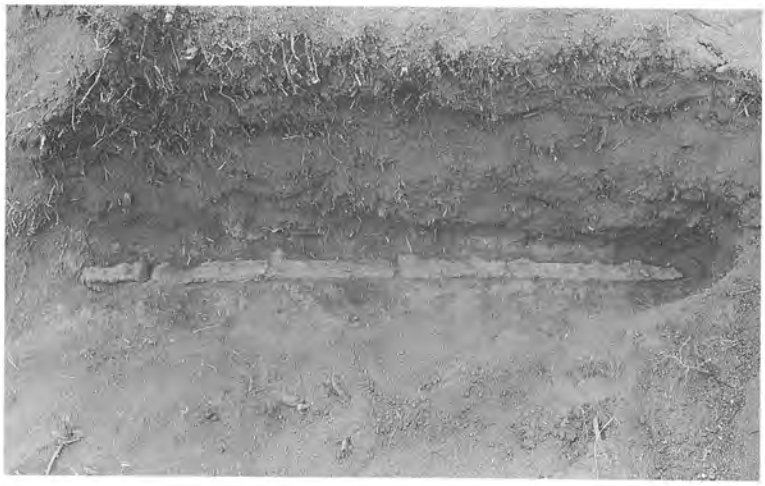
第１～７号土坑

第２号土坑(粘土貼)

作業風景(北部斜画)

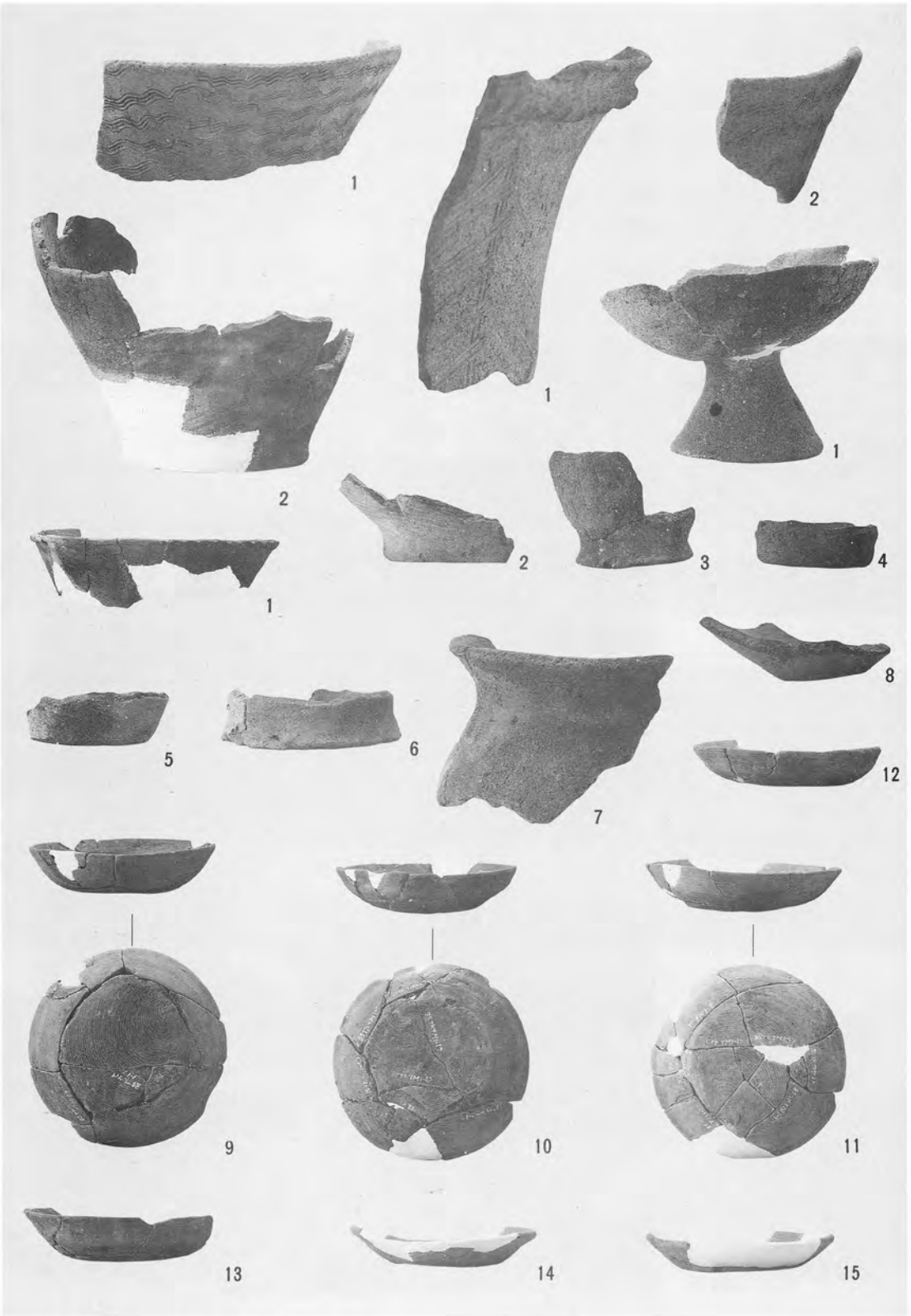
作業風景(第１号墳)

第 3 号住居跡
遺物出土状況

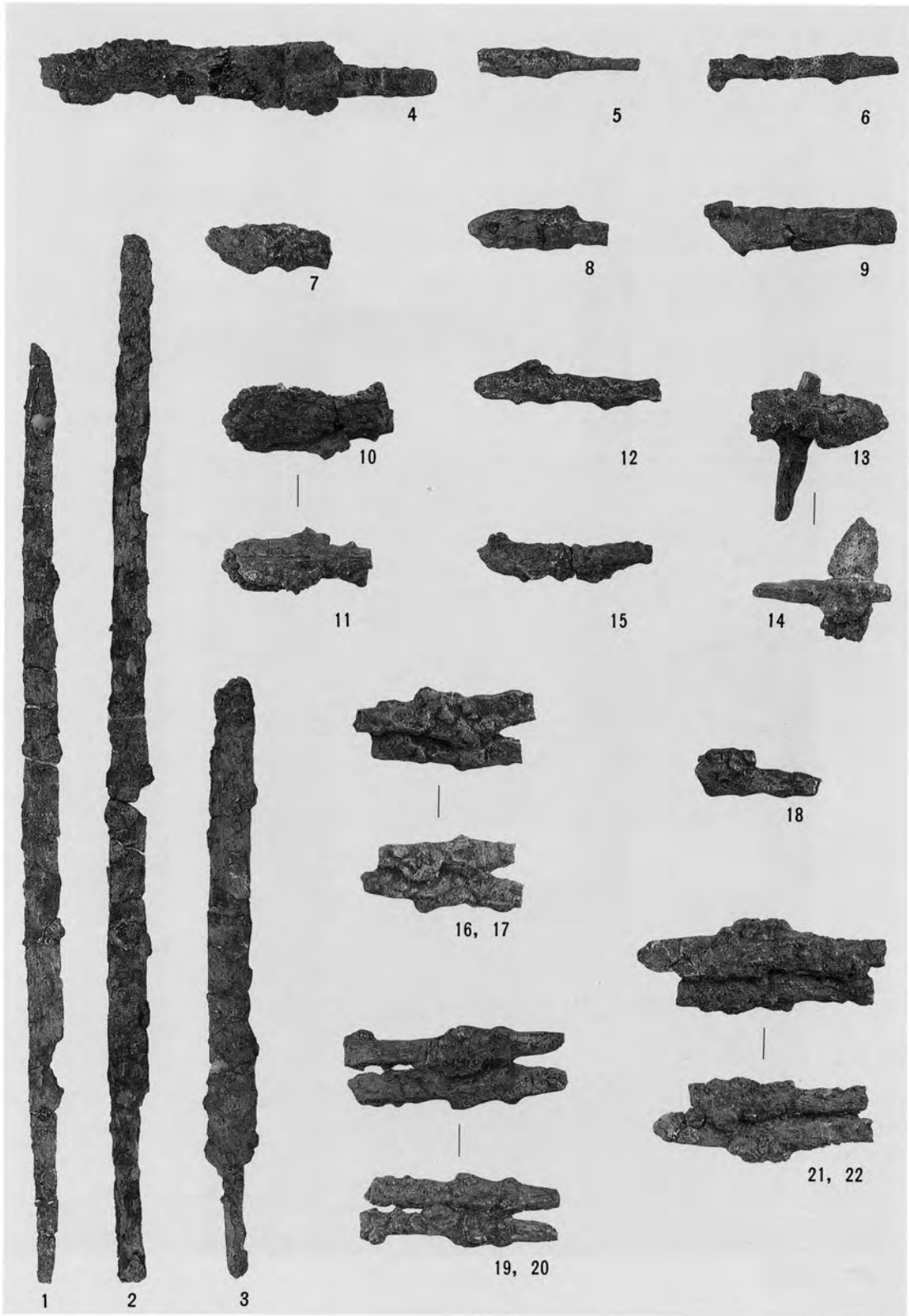


第 1 号墳
遺物出土状況

第 1 号墳
土層断面



第１～３号住居跡，遺構外出土遺物（第22図）

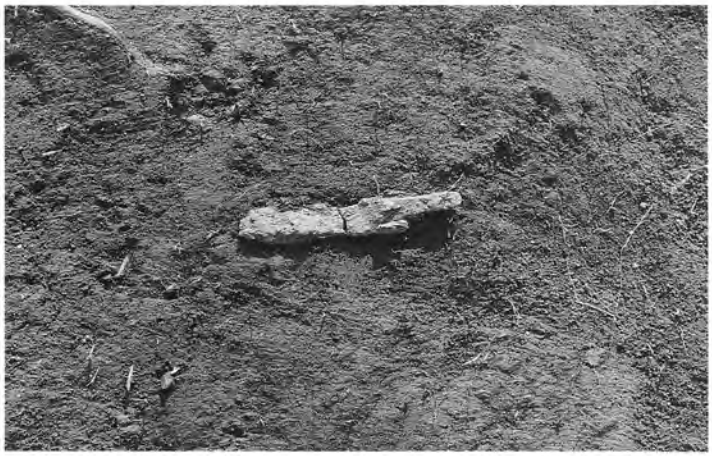


第1号墳出土遺物(第17図)

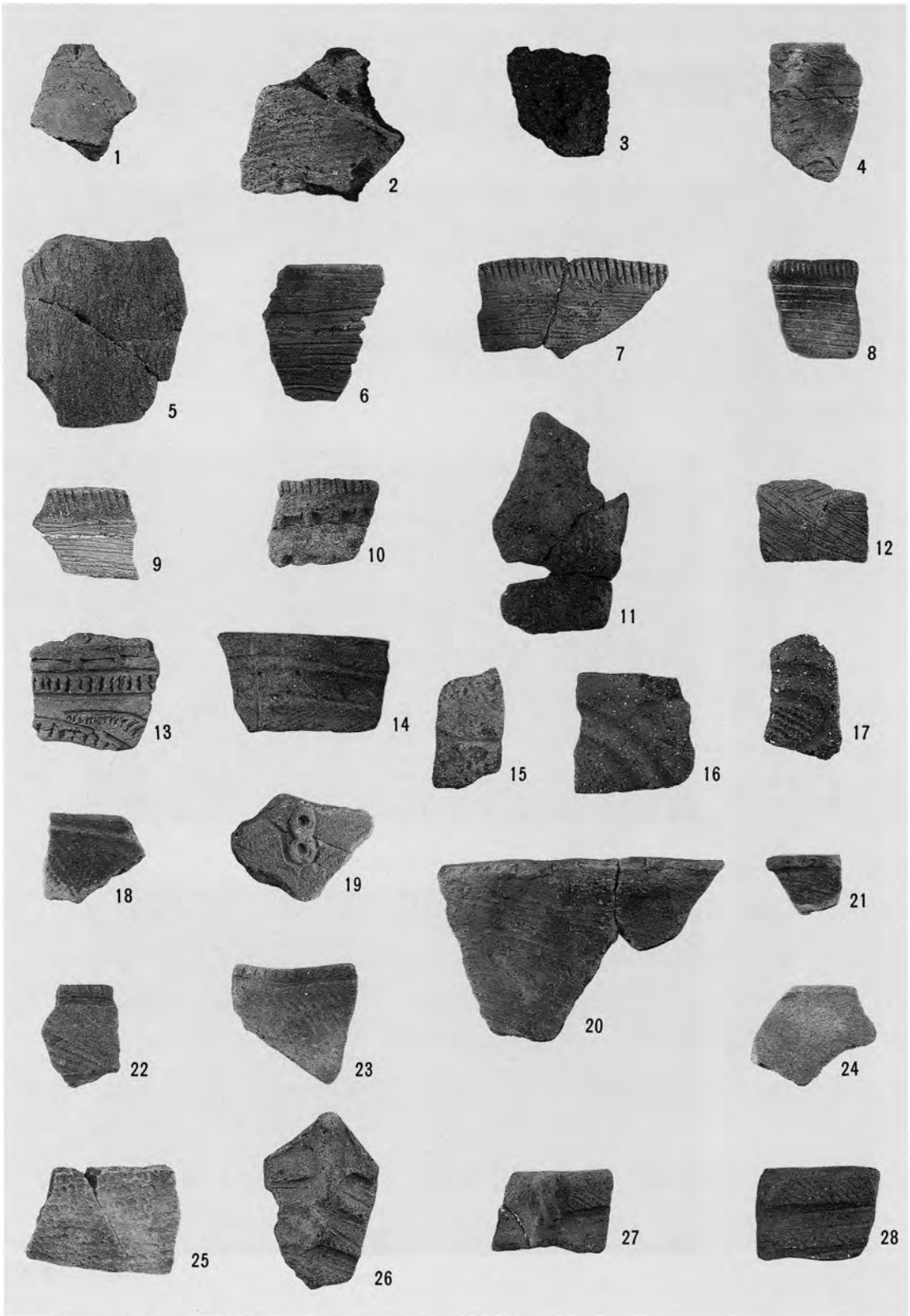
遺物X線写真

遺物Ｘ線写真

第１号墳
遺物出土状況



第１号墳
遺物出土状況



遺構外出土遺物－１（第20図）

遺構外(第21図・29～43)第12号住居跡出土遺物－2(第8・10図)

遺構外出土遺物－3（第23・24図）

茨城県教育財団文化財調査報告第78集

主要地方道茨城鹿島線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書

梶　山　城　跡

平成４年６月25日　印刷
平成４年６月30日　発行

発　行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町３丁目４番57号
ＴＥＬ　0292－25－6587

印　刷　株式会社 三栄印刷
水戸市谷津町１－50
ＴＥＬ　0292－52－6501